令和２年度
出雲市文化財調査報告書

神庭岩船山古墳
上塩冶横穴墓群
（第 41 支群）

2021 年 3 月

出雲市教育委員会

令和２年度
出雲市文化財調査報告書

神庭岩船山古墳
上塩冶横穴墓群
（第 41 支群）

2021 年 3 月

出雲市教育委員会

序

本書は，2016（平成28）年度に実施した，旧荘原幼稚園舎解体等に伴う島根県指定史跡・神庭岩船山古墳の範囲確認調査と，出雲市都市建設部建設企画課から依頼を受けて2014（平成26）年度に実施した，半分公園整備事業に伴う上塩冶横穴墓群の範囲確認調査の記録を収録した報告書です。

神庭岩船山古墳は，出雲市斐川町荘原に所在する古墳時代中期の前方後円墳です。当時は水辺（古宍道湾）に面していたと考えられる古墳で，墳丘上にはそれを示すかのような大型の舟形石棺が横たわります。

上塩冶横穴墓群は，上塩冶町に所在する古墳時代の遺跡で，総数236基もの横穴墓が発見された県内最大の横穴墓群です。いずれの遺跡も文化財的な価値は高く，今回の調査成果が，出雲地域の歴史を解明していく上での貴重な資料の一つとして活用されることが期待されます。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査と報告書作成にあたりご協力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申しあげます。

2021（令和3）年3月

出雲市教育委員会

教育長　杉谷　学

例　言

1．本書は，2016（平成 28）年度に実施した，旧荘原幼稚園舎解体等に伴う島根県指定史跡・神庭岩船山古墳の範囲確認調査と立会調査，2014（平成 26）年度に実施した，半分公園整備事業に伴う上塩冶横穴墓群の埋蔵文化財範囲確認調査の成果をまとめた報告書である。

2．調査は下記の体制，期間で実施した。

【現地調査】

○神庭岩船山古墳　立会調査・史跡範囲確認調査

調査地及び調査面積　島根県出雲市斐川町荘原２７３外　約 61㎡

調査期間　2016（平成 28）年８月１日～９月 20 日（園舎解体に伴う立会調査）

2016（平成 28）年 11 月 28 日～ 2017（平成 29）年１月 10 日（範囲確認調査）

2017（平成 29）年３月 10・11 日（フェンス工事に伴う立会調査）

調査体制　※肩書は平成 28 年度当時

事務局　花谷　浩（出雲市市民文化部学芸調整官）

佐藤隆夫（　同　文化財課長）

調査員　宍道年弘（　同　文化財課課長補佐兼埋蔵文化財１係長）

原　俊二（　同　埋蔵文化財２係長）

石原　聡（　同　主任）

調査補助員　足立敏郎　永見　翼　樋野千晴（　同　臨時職員）

発掘作業員　大輝正人　奥田利晃　黒田元延　昌子守男　樋野光正　星野篤史　渡部和憲

調査協力　株式会社　山興

調査にあたって，次の方々からご指導いただいた（敬称略，肩書は平成 28 年度当時）。

大谷晃二（島根県立松江北高等学校教諭），西尾克己（大田市教育委員石見銀山課特任講師），松本岩雄（島根県立八雲立つ風土記の丘所長），守岡利栄（島根県教育庁文化財課企画員），渡邊貞幸（出雲弥生の森博物館館長）

○上塩冶横穴墓群第 41 支群　範囲確認調査

調査地及び調査面積　島根県出雲市上塩冶町字半分９０６－１外　約 44㎡

調査期間　2015（平成 27）年２月 17 日，３月 13 日，３月 16 日

調査体制　※肩書は平成 26 年度当時

事務局　花谷　浩（出雲市市民文化部学芸調整官）

玉木良夫（　同　文化財課長）

宍道年弘（　同　文化財課課長補佐兼埋蔵文化財１係長）

調査員　景山真二（　同　埋蔵文化財２係長）

江角　健（　　同　　主任）

調査補助員　大田晴美　樋野千晴（　　同　　臨時職員）

発掘作業員　大輝正人　岡田光司　樋野光正　星野篤史　森脇昭夫　渡部和憲

【報告書作成】

〈2020（令和２）年度〉

事務局　　片寄友子（出雲市市民文化部次長兼文化財課長）

大梶智徳（　　同　　文化財課主査）

調査員　　原　俊二（　　同　　課長補佐兼埋蔵文化財２係長）

石原　聡（　　同　　主任）

景山このみ（　　同　　主事）

黒田祐介（　　同　　主事）

調査補助員　長岡伸幸（　　同　　会計年度任用職員）

室内整理作業員　吹野初子　中島和恵　石原和子（　　同　　会計年度任用職員）

報告にあたって，次の方々からご指導をいただいた（敬称略）。

花谷浩（出雲弥生の森博物館館長），宍道年弘（荒神谷博物館企画員）

3．本書の執筆は，原，石原，景山，黒田が分担して行い，編集は景山が行った。

4．本書に掲載した出土品のうち，第 11 図は田中（2016）から転載した。また，第 16 図の実測は黒田が行った。

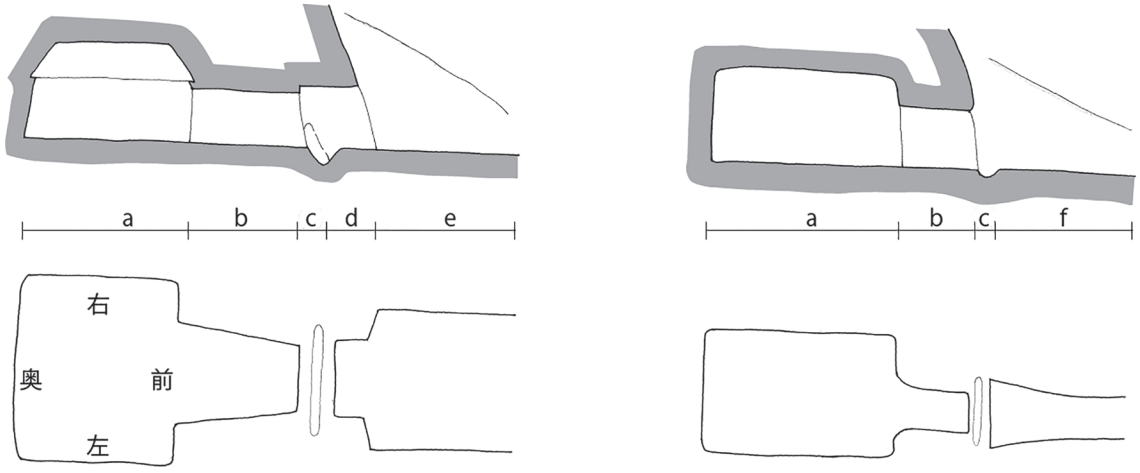
5．本書に掲載した写真は，いずれも調査員が撮影した。

6．本書に掲載した遺物及び実測図，写真は出雲市文化財課が保管している。

7．本書で使用した方位は，座標北を示す。座標は，世界測地系第Ⅲ系に基づくものである。標高は海抜高を示す。

9．本書で使用した横穴墓の遺構内名称，形態名称は下図のとおりである。

10．本書の執筆にあたり参考にした文献は各章末に記した。



a 玄室　b 玄門　c 閉塞部　d 羨道　e 前庭部　f 墓道

横穴墓各部位名称（模式図）

本文目次

第１章　神庭岩船山古墳の調査 ……1

第１節　調査に至る経緯 ……1

第２節　調査の経過 ……1

第３節　遺跡の位置と歴史的環境 ……2

第４節　過去の調査 ……3

第５節　調査の概要 ……9

第６節　結語 ……11

第２章　上塩冶横穴墓群第 41 支群の調査 ……17

第１節　調査に至る経緯と経過 ……17

第２節　遺跡の位置と環境 ……18

第３節　調査の成果 ……19

第４節　結語 ……22

挿図目次

第１図　神庭岩船山古墳位置図 ……3

第２図　墳丘測量図１ ……5

第３図　墳丘測量図２ ……6

第４図　墳丘測量図３ ……7

第５図　東防空壕跡（上）・西防空壕跡（下）土層図 ……8

第６図　工事立会時の土層柱状図 ……10

第７図　トレンチ配置図 ……12

第８図　トレンチ土層図 ……13

第９図　墳丘測量図・墳丘縦横断面図 ……14

第 10 図　墳丘復元図 ……15

第 11 図　防空壕跡出土埴輪実測図 ……15

第 12 図　石棺実測図 ……15

第 13 図　上塩冶横穴墓群（第 41 支群）調査地位置図 ……17

第 14 図　上塩冶横穴墓群と周辺の後期古墳 ……18

第 15 図　１～４トレンチ土層断面図 ……19

第 16 図　出土遺物実測図 ……21

写真図版目次

図版１　神庭岩船山古墳　遠景（北西から）
神庭岩船山古墳　全景（北西から）
図版２　神庭岩船山古墳　全景（西から）
南側墳丘側面（東から）
図版３　墳丘西側の現状（南東から）
後円部上の舟形石棺（北東から）
図版４　旧荘原幼稚園舎　解体前の状況
（南から，右側が古墳）
旧荘原幼稚園舎　解体作業中の状況（西から）
図版５　立会調査（ポイント１）土層堆積状況
立会調査（ポイント３）土層堆積状況
図版６　立会調査（ポイント４）土層堆積状況
立会調査（ポイント５）土層堆積状況
図版７　東防空壕跡　調査前（北東から）
東防空壕跡　埋め戻し後の状況（北から）
図版８　東防空壕跡　東壁（西から）
東防空壕跡　東壁２（西から）
東防空壕跡　東壁～奥壁（北西から）
東防空壕跡　奥壁～西壁（北東から）
図版９　東防空壕跡　西壁（東から）
東防空壕跡　西壁２（東から）
西防空壕跡　調査前（北から）
図版 10　西防空壕跡　完掘状況（北から）
西防空壕跡　東壁（西から）
図版 11　西防空壕跡　調査中の様子
西防空壕跡　西壁（東から）
図版 12　神庭岩船山古墳周辺米軍撮影写真
（1947（昭和 22）年撮影）
神庭岩船山古墳周辺航空写真
（2018（平成 30）年撮影）
図版 13　範囲確認調査箇所　全景（南西から）
１トレンチ　完掘状況（西から）
図版 14　１トレンチ　南壁土層（北東から）
１トレンチ　東～南壁土層（北西から）
図版 15　２トレンチ　完掘状況（南から）
２トレンチ　東壁土層（南西から）
図版 16　３トレンチ　完掘状況（南から）
３トレンチ　東壁土層（南西から）
図版 17　４トレンチ　完掘状況（南から）
４トレンチと墳丘（後円部）の位置関係
図版 18　４トレンチ　東壁土層（南西から）
４トレンチ　北壁土層（南から）
図版 19　前方部トレンチ（西から，手前は１トレンチ）
図版 20　フェンス工事（北から）
フェンス工事（南から）
図版 21　神庭岩船山古墳　出土遺物
図版 22　上塩冶横穴墓群（第 41 支群）調査前（南西から）
１トレンチ完掘状況（南西から）
図版 23　２トレンチ完掘状況（南西から）
２トレンチ北壁土層（南東から）
３トレンチ完掘状況（南から）
４トレンチ完掘状況（北から）
５トレンチ完掘状況（北から）
６トレンチ完掘状況（北から）
図版 24　上塩冶横穴墓群（第 41 支群）出土遺物

第１章　神庭岩船山古墳の調査

第１節　調査に至る経緯

神庭岩船山古墳は，出雲市斐川町荘原の出雲市立荘原小学校敷地内（西南隅）に所在する，県指定史跡の前方後円墳である。復元墳長については，前方部先端部が失われていることから 48 ～ 60 m と幅のある見解が示されてきた（本庄考古学研究室 2018）。また，後円部墳頂には，長さ３m近い舟形石棺の蓋のみが割れた状態で安置されている（図版３下）。

2016（平成 28）年６月，出雲市教育委員会教育施設課から，古墳の西側に隣接して建てられていた旧荘原幼稚園の園舎および付属施設の解体撤去工事について文化財課に協議があった。園舎の東側に神庭岩船山古墳が隣接することから，解体工事時に工事立会を行うこととなった。

また，これまで園舎の存在により古墳の規模等が不明確であったことから，島根県教育庁文化財課の指導により，解体工事後に保存目的の範囲確認調査を行うこととした。

第２節 調査の経過

１　工事立会（解体工事）

2016（平成 28）年６月 15 日，文化財保護法第 94 条の規定による埋蔵文化財発掘の通知が提出され，それを受けて県から工事立会を行うよう勧告を受けた。解体工事は７月 11 日から開始されたが，立会調査は園舎を解体した後，８月から基礎の撤去が始まるのに合わせ開始した。調査の結果，遺構・遺物は確認できず，園舎跡地は既に削平を受けており，古墳に関係する遺構は存在しないことが明らかとなった。

２　範囲確認調査

神庭岩船山古墳の前方部は特に削平が著しく，古墳の規模等が不明確であったが，前方部を取り囲んでいた園舎が解体されたため，この機会を捉えて古墳本来の規模や範囲を確定するため発掘調査を実施することとなった。当初予定していなかった調査のため，国庫補助事業の市内遺跡確認調査事業を計画変更し，この調査の経費にあてることとした。

11 月 18 日に県指定史跡の現状変更が許可され，11 月 25 日には国庫補助事業の計画変更が承認されたことから，11 月 28 日から範囲確認調査を開始した。古墳の東側及び北側は荘原小学校のグラウンド等に使用されており，調査が可能な場所は西側及び南側の旧荘原幼稚園跡地のみであったことから，西側に１箇所，南側に３箇所のトレンチを設定し，重機及び人力掘削により調査を行った。

調査の結果，遺構・遺物は確認できず，前方部に伴う盛土や外表施設等は後世の改変により失われている可能性が大きいことが判明した。調査は，2017（平成 29）年１月 10 日に終了した。

３　工事立会（フェンス工事）

園舎の解体に伴い，幼稚園跡地と荘原小学校のグラウンドを区切る施設がなくなったため，出雲市（教育施設課）は，児童の古墳への進入を防ぐため，古墳の西側にフェンスを設置する計画を立てた。史跡地内であることから現状変更申請を行い，2017（平成29）年１月20日付で許可を受け，３月10・11日に工事が実施された。フェンスはグラウンドと園舎跡地を区切るため，前方部北側から西の道路境までと，後方部西側の園舎跡地と西側道路の境に設置された。

フェンスの基礎掘削はすべて人力で行われ，それに併せ土層や遺物の確認を行った。基礎掘削は，一辺約45㎝，深さ約50㎝で，グラウンドの造成土（茶褐色土）の下は地山であった。遺物は出土しなかった。

第３節　遺跡の位置と歴史的環境

神庭岩船山古墳（第１図１）が所在する丘陵は，高瀬山（標高306ｍ）から北に向かって派生するいくつかの尾根のうち，最も南北に長い尾根の先端に位置する。尾根の先端部は周囲の水田からの比高差も小さく，なだらかに高くなり，神庭丘陵とも呼ばれている。

この丘陵には，弥生時代の特徴的な遺跡が分布しており，神庭岩船山古墳の西南0.6㎞に鎮座する諏訪神社周辺には，四隅突出型墳丘墓を含む神庭古墳群（２）や田中古墳群（３）がある。さらに南1.2㎞には青銅器の大量埋納遺跡として知られる国指定史跡・荒神谷遺跡（５）が位置する。

古墳時代には，神庭岩船山古墳の南6.5㎞の尾根裾に市指定史跡の小丸子山古墳（円墳，32ｍ・４）が築かれた。東1.8㎞の低丘陵上には軍原古墳（円墳，28ｍ・７）や軍原千人塚古墳（円墳，30ｍ・８）があり，西1.4㎞には白壁古墳（方墳，30ｍ・６）が知られている。これらの古墳の年代は，全て古墳時代中期と考えられている。また，古墳の周辺には神庭丘陵北遺跡（９）が広がり，古墳時代以降の遺物が散布する。

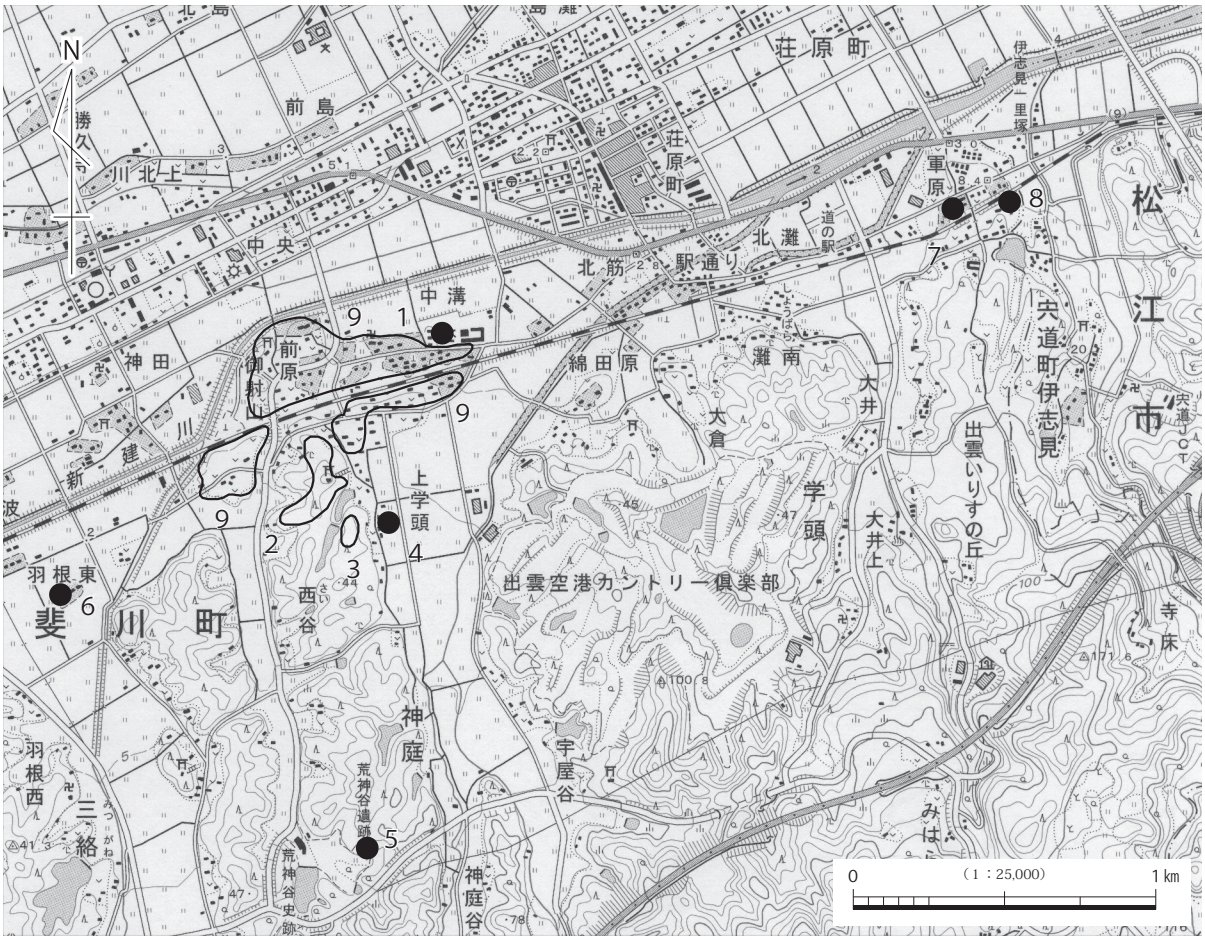
このように，東西３㎞，南北２㎞あまりの狭い範囲に，弥生時代中期から古墳時代中期にかけての注目される遺跡が集中する。

奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によれば，この一帯は出雲郡の健部郷にあたる。また，古墳北側の平野部は，現在の宍道湖が西側に大きく広がり，当時は水域（古宍道湾）が広がっていたと考えられている。

第４節　過去の調査

神庭岩船山古墳は1968（昭和43）年に県指定史跡となっていることから，古くから調査が行われ，古墳について記載された文献も多数存在する。

近年では，2018（平成30）年に発表された本庄考古学研究室による墳丘測量調査報告（内田ほか2018）において，山本清による1951（昭和26）年の報告以降，長年にわたって蓄積されてきた調査や文献の内容が端的に整理されたので，ここでは旧斐川町教育委員会が行った調査を中心に紹介する。



1　神庭岩船山古墳　2　神庭古墳群　3　田中古墳群　4　小丸子山古墳　5　荒神谷遺跡　6　白壁古墳　7　軍原古墳　8　軍原千人塚古墳　9　神庭丘陵北遺跡

第１図　神庭岩船山古墳位置図

本庄考古学研究室による測量成果（第２図）

1979（昭和 54）年に測量され，2018（平成 30）年に公表された測量図である（内田ほか 2018）。

等高線には標高が用いられており，標高が付く測量図では最も古いものである。国土座標値はないが，今回掲載に当たって世界測地系の座標値を付した。測量図の範囲は，墳丘を中心に南側道路の先の畑地まで，西側は園舎とその先の南北道路が表現されている。墳丘には，北側に防空壕跡の窪みが２箇所確認できる。南側道路幅は後円部付近から西側で，今の半分の道幅であったことがわかる。

なお，1982（昭和 57）年に墳丘の土砂流出防止のため，旧斐川町教育委員会により墳丘の周囲にコンクリート擁壁及び三面水路が設けられた。この際，墳丘の周囲が掘削されたが，第２図はそれ以前の墳裾の状況が分かる測量図である。

斐川町教育委員会による測量成果（旧図）（第３図）

1984（昭和 59）年に測量がなされ，測量会社によって測量図に調整されたようである[1]。

等高線には標高が用いられる。国土座標値はないが，今回，世界測地系の座標値を付した。測量図の範囲は，墳丘を中心に南側道路の半分，西側は園舎の一部までで，墳丘の北側には防空壕跡の窪みが２箇所確認できる。この図は，『斐川町史　その後（二）』（金築・宍道 1986）で公表されている[2]。

防空壕跡の埋め戻し作業に伴う調査成果（第５図）

旧斐川町では，古墳の維持管理に万全を期すため，1984（昭和 59）年から５箇年計画で保存整備計画を立てた。その一環として，1985（昭和 60）年度・1986（昭和 61）年度に防空壕跡２箇所の埋め戻し等に伴う調査が行われた。

1985（昭和 60）年度は，東防空壕跡（１号），翌年には西防空壕跡（２号）について，いずれも県補助金を用いて埋め戻しを実施した。埋め戻しに先立って壕内を調査し，土層を記録した[3]。東防空壕跡の土層図では旧表土が認められないが，西防空壕跡では，標高約８m付近に旧表土（黒色土）と地山が明瞭に認められる。いずれの土層図も，今回初めての公表となる。

さらに，調査では東防空壕跡から 26 点以上，西防空壕跡８点以上の埴輪片が出土した[4]。

なお，聞き取り調査によれば墳丘南側には防空壕はなかったようである。

斐川町教育委員会による測量成果（新図）（第４図）

1988（昭和 63）年に測量がなされ，測量会社によって測量図に調整されたようである[5]。

等高線には標高が用いられている。国土座標値（日本測地系）がついた最初の図である。今回，世界測地系に変換した。測量図の範囲は，墳丘を中心に南側道路の先の畑地までで，西側には園舎の一部が表現されている。墳丘北側の防空壕跡は，等高線のわずかな変化により痕跡を認めることができる。この図は，現地に設置されている古墳の説明看板のみに使用されている。

３枚の墳丘測量図（第２～４図）を比較すると，墳丘に関わる改変として，墳裾の工事と防空壕跡の埋め戻しが挙げられる。また，周辺地形は，南側道路の拡張，南側及び西側道路の古墳側の擁壁工事，南側道路からグラウンドへの進入口付近の改変，園舎の拡張と園庭の遊具類の変更等を認めることができる。このように複数回にわたる改変が加わっているものの，基本的には，墳丘や周辺環境は 1979（昭和 54）年の測量以降大きく変化していないことが分かる。

註

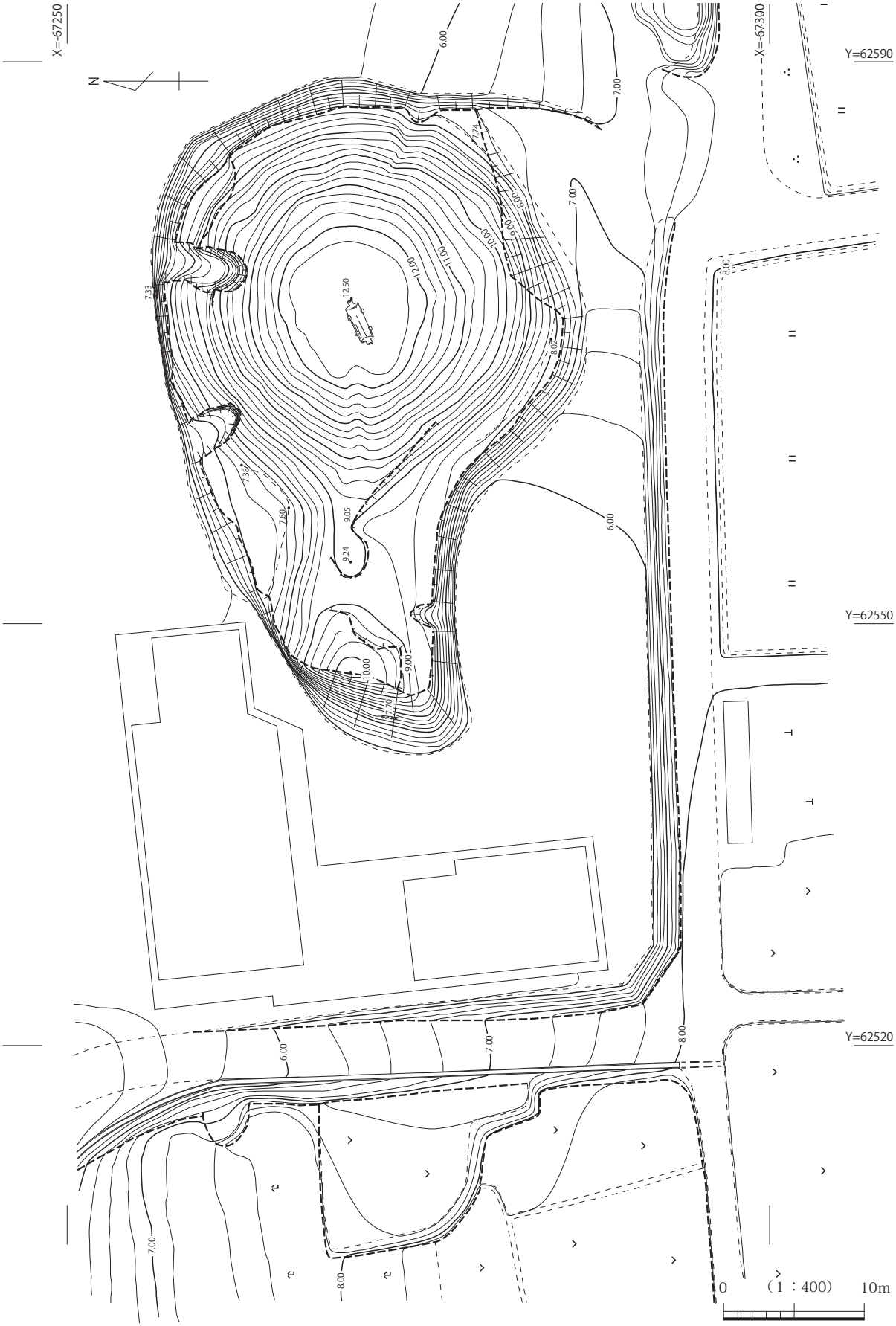
（１）測量は，旧斐川町教育委員会が実施していた結古墳群（現在，島根富士通の工場敷地）の発掘調査に参加していた奈良大学の学生を中心に行われた。

（２）（内田ほか 2018）の測量図が公表されるまでは，墳丘測量により標高が表記された測量図では最も古い図であった。なお，同報告で指摘されているように，当初の図面は標高の数字の位置がずれているので注意が必要である。第３図では位置を修正して掲載した。

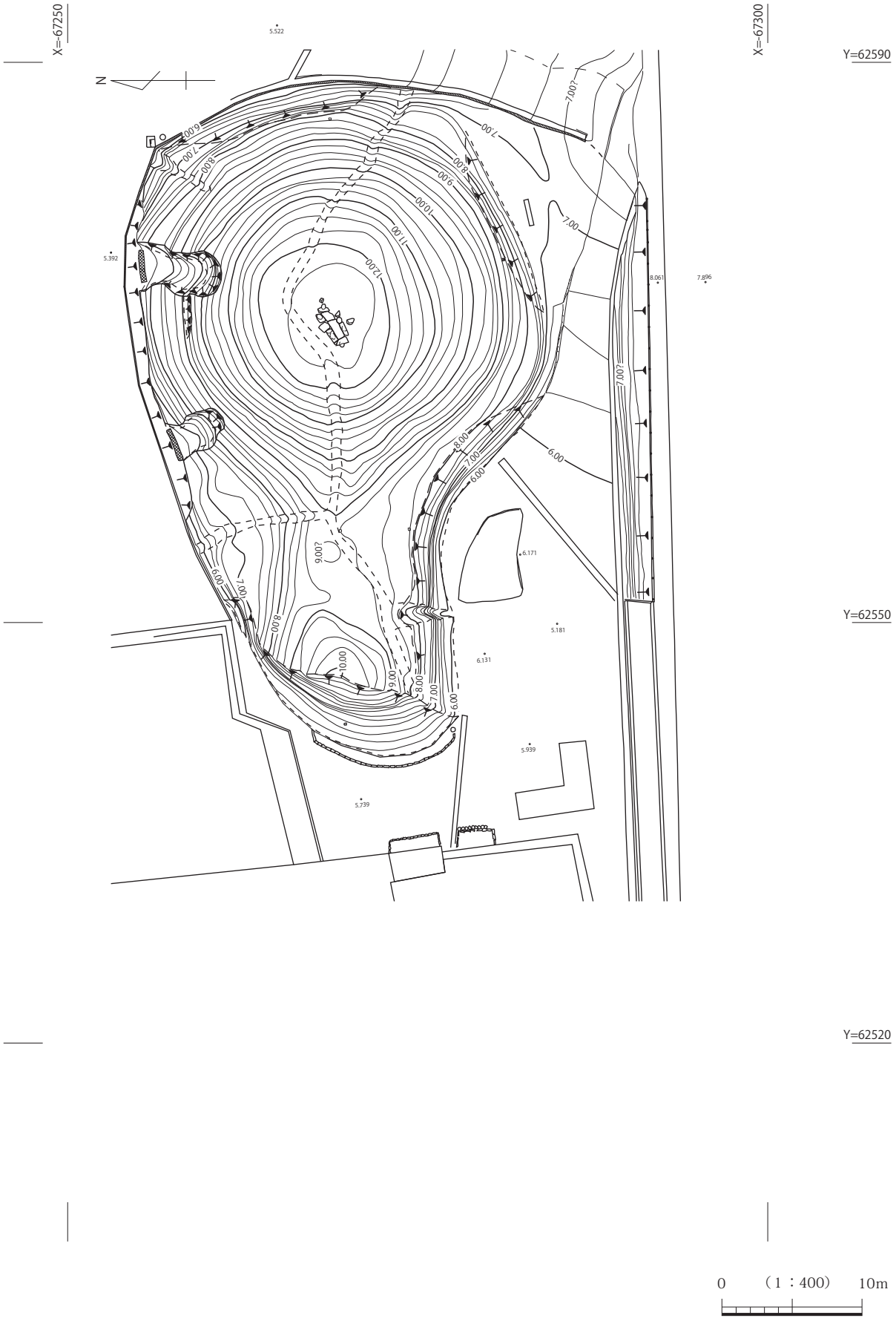
（３）東防空壕跡の土層図は，付近に設置された基準点の標高をもとに作成されたと考えられるが，その記録を記した資料が見つけられなかった。そのため，基準点からの高さと思われる数値を（仮）として記しておく。

（４）２箇所の防空壕跡から出土した埴輪片は，田中大が紹介している（田中 2016）。この中で，埴輪片は東防空壕跡からのみ出土したかのように紹介されているが，実際は両方から出土している。破片の中から部位や調整痕がわかる資料４点を転載した（第 11 図）。

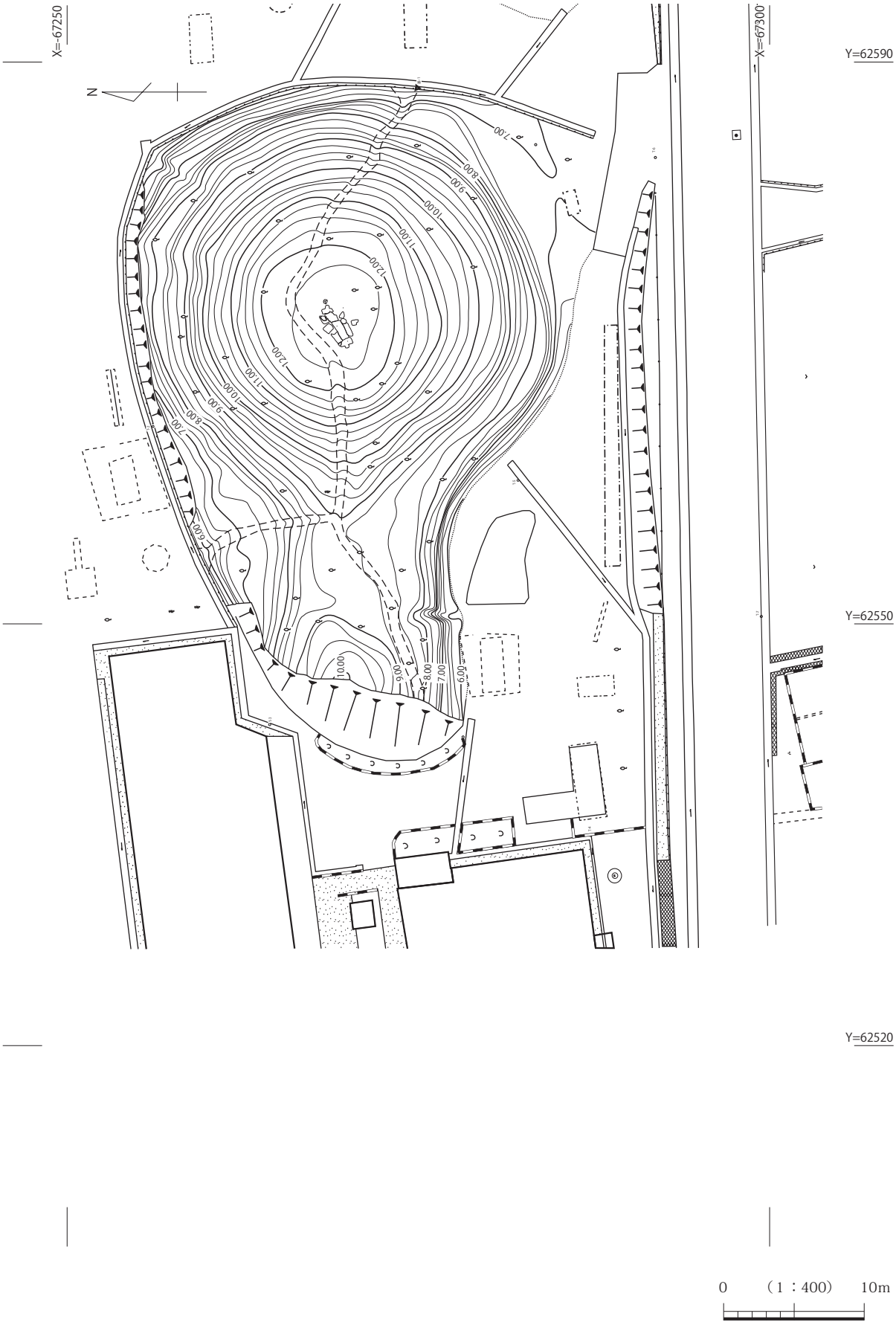
（５）調整段階の図面では，園舎と西側道路の一部が表現されていたが，納品された最終図からは除外されている。



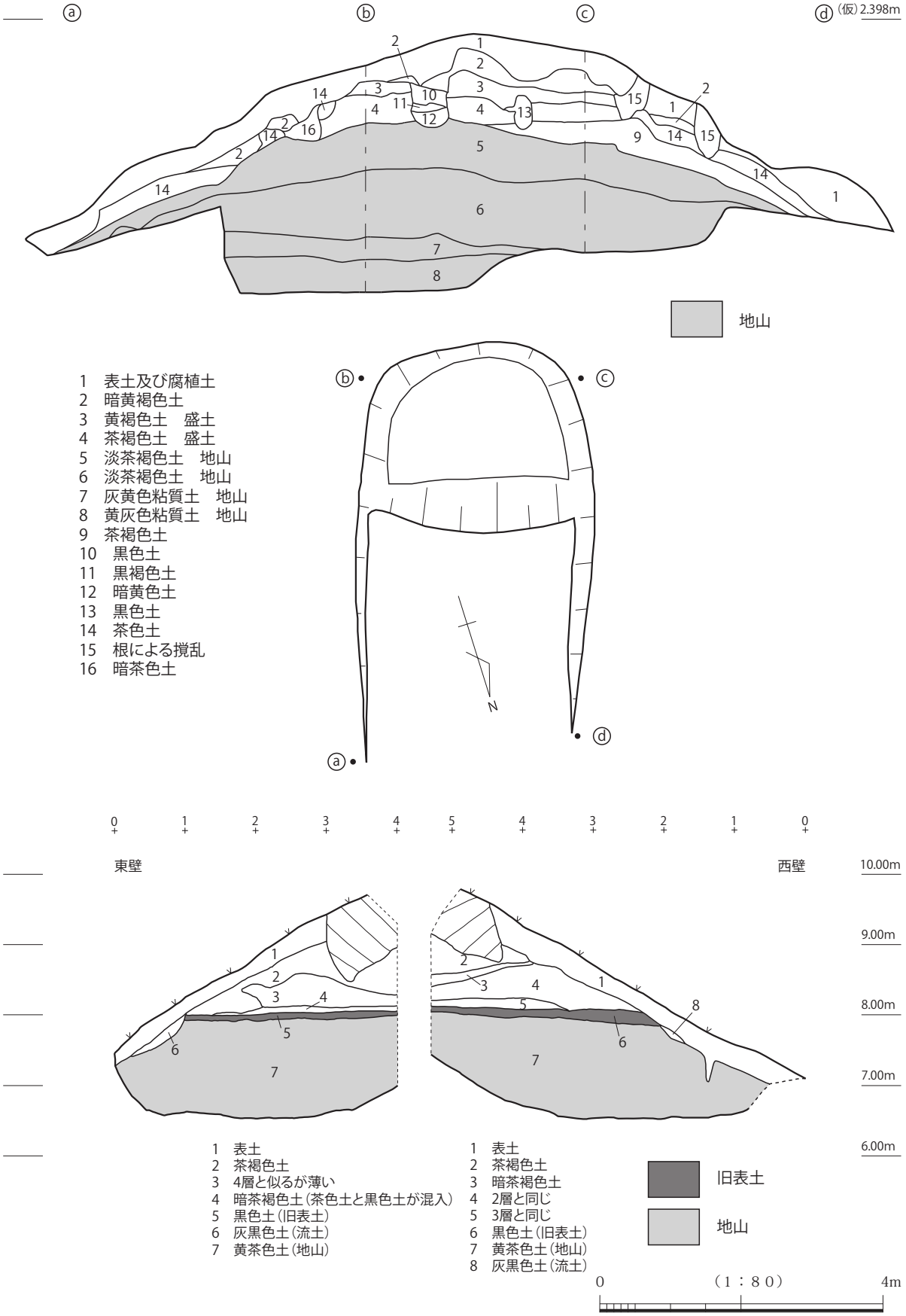
第２図　墳丘測量図１（本庄考古学研究室測量図（内田ほか 2018）を一部改変）



第３図　墳丘測量図２（旧斐川町教育委員会 1984 年測量図を一部改変）



第４図　墳丘測量図３（旧斐川町教育委員会 1988 年測量図を一部改変）



第５図　東防空壕跡（上）・西防空壕跡（下）土層図

第５節　調査の概要

１　立会調査（第６図）

（１）　調査の方法

立会調査は，園舎の基礎撤去工事にあわせて実施した。特に，削平が著しい前方部の本来の規模や形態の確認を主目的とした。

（２）　調査の概要

園舎・園庭跡では，造成土・攪乱土直下の地表下約 0.2 ～ 0.7 mで地山を確認した。

また，３箇所（ポイント３～５）で，地表下約 1.5 ～ 1.8 mまで掘り下げたが同様な状況であり，その内１箇所（ポイント５）では，ごみ捨て場として地表下約 1.3 mまで掘削が及んでいた。

調査の結果,工事範囲においては古墳の盛土や周溝などの遺構は確認できず,遺物も確認できなかった。このことから，古墳に関わる諸施設は完全に削平されている可能性が大きいと判断した。

２　範囲確認調査（第７・８図）

（１）　調査の方法

削平された前方部の残存状況確認のため，墳丘主軸上及びその直交方向に４箇所のトレンチを設定した。重機により表土を除去した後，人力掘削により古墳に伴う遺構・遺物の有無を確認した。発掘調査終了後は，埋め戻しを行い原状復旧した。

（２）トレンチ調査の概要

１トレンチ

前方部前面の墳丘主軸上に設けた 1.5 × 15 mのトレンチである。地表下 0.4 ～ 0.5 mで地山を確認し，その間の明褐色土は造成土，黄褐色土の掘り込みは近現代のいぶし瓦を含む攪乱坑であった。

前方部の先端などの遺構は確認できず，遺物も出土しなかったことから墳丘に関する遺構は完全に削平されている可能性が大きい。

２トレンチ

前方部南側の墳丘主軸直交方向に設けた 1.5 × 12 mのトレンチである。トレンチ中央部で，長さ 11 m以上，深さ 1.0 m前後の黒褐色～褐灰色土で埋まる落ち込みが確認できた。落ち込みからは，多量の木片，近現代の瓦，瓶の破片などが出土した。近隣住民への聞き取りでは，太平洋戦争前後まで「ひょうたん池」が存在したとのことであり，この落ち込みが「ひょうたん池」跡と考えられる。また,池の北側（墳丘側）も攪乱されていると考えられ,トレンチの北側墳丘近接部分まで及んでいた。

古墳に関係する遺構・遺物が確認できないことから，完全に削平されていると考えられる。

「ひょうたん池」跡（攪乱土）の出土遺物として，ガラス瓶がある（図版 21 下）。１は褐色を呈する瓶で，縦に接合痕がある。高さ 11.2cm で，瓶の外面４箇所に浮彫があり，胴部には桜のマークの中に「共／存／同／栄」の４文字とラベル貼付用の四角い囲みが見られる。底部付近には「ZENKOREN」,

第６図　工事立会時の土層柱状図

底部には「４」とある。これらの記載から，全国購買販売組合連合会の瓶であることが分かる。２はくすんだ青色の瓶で，縦に接合痕が見える。残存長 7.1cm。また，３は透明な小瓶で，アンプルと考えられる容器である。残存長 6.1cm。

３トレンチ

くびれ部南側で墳丘主軸直交方向に設けた 1.5 × 11 mのトレンチである。トレンチの北側墳丘近接部分の堆積土は攪乱層（褐灰色土からにぶい橙色土）であった。部分的に表土から 1.0 m前後掘り下げたところで地山層を確認したが，その直上の層，特に灰褐色粘土層（７層）が，近現代陶磁器やガラス片を含む攪乱層であったことから，地山までの全面掘削は行わなかった。古墳に関係する遺構・遺物が確認できないことから，完全に削平されていると考えられる。

４トレンチ

後円部南側の墳丘主軸直交方向に設けた 1.5 × 5 mのトレンチである。トレンチの北側墳丘近接部分で，浅黄橙色土の地山層（５層）の落ち込みが確認できた。この落ち込みの埋土からはレンガや近現代陶磁器が出土したため，途中で掘削を中止した。

調査の結果，基本的に全てのトレンチにおいて，地表下 0.4 ～ 1.0 mで地山が確認できたが，古墳の墳端や周溝などの遺構や遺物は確認できず，地山より上の土層は近現代の造成土・攪乱層であることが明らかとなった。このことから，古墳の西側・南側の範囲においては，古墳に関する遺構は完全に削平されている可能性が大きいと判断した。

なお，トレンチ調査にあわせて前方部の墳丘西側断面の土層を精査し，標高 7.8 m前後で厚さ約 10㎝の旧表土層を確認した。

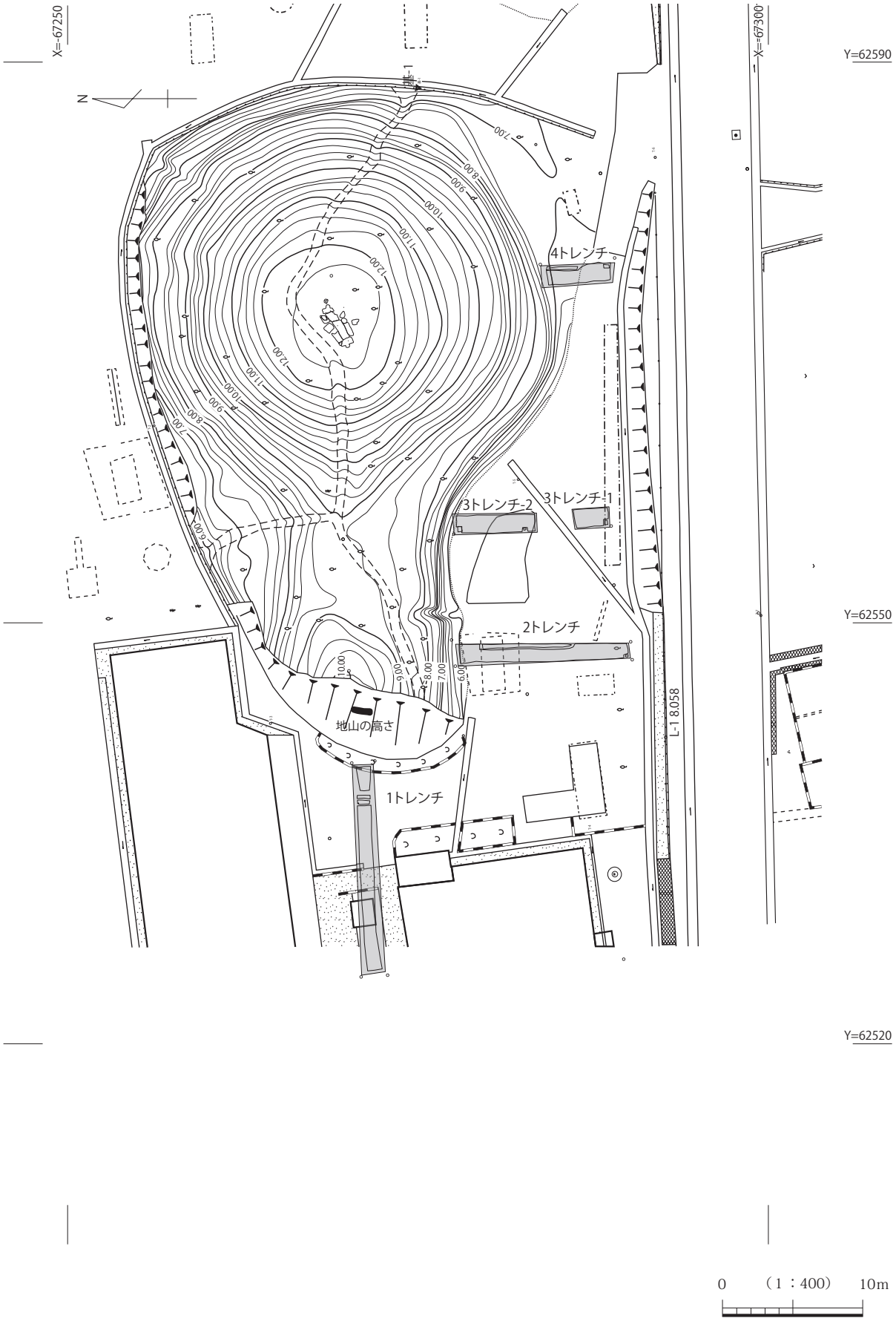
第６節　結語

今回，旧荘原幼稚園解体工事に伴い立会調査・範囲確認調査を実施した。しかし，予想に反し古墳に関連する遺構・遺物を確認することはできなかった。一方，この機会に整理した旧斐川町教育委員会の調査資料により，古墳の築造方法の検討資料を得ることができた。本節では，後円部の防空壕跡の土層（第５図）と，前方部の墳丘西側断面の観察結果を用いて，墳丘の築造方法を検討する（第９図）。

後円部の東防空壕跡の土層からは，東西両壁ともに地山が北側墳端から南側墳丘中心に向かって徐々に高くなることが分かる。また，防空壕跡平面図を，防空壕跡が表現されている測量図（第３図）と合成し，そこから標高を読み取ると，東壁の地山は北側墳端で標高 7.3 m，南側で標高 9.2 mとなる。また，西壁の地山は，北側墳端で標高 8.0 m，南側で標高 8.9 mとなり，南側の高さは東壁と比較して 0.3 m低い。

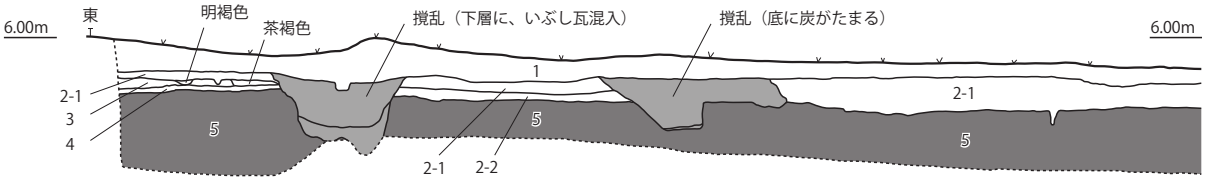
一方，西防空壕跡の土層は，東西両壁ともに地山が標高 7.8 ～ 7.9 m付近で水平になり，さらにその上に旧表土が明確に確認できることから，旧地形が平坦であったと推定できる。

このように，東西両防空壕跡の土層を比較すると，対照的な在り方を示しており，この違いは，防空壕跡が掘られた位置と，旧地形によるものではないかと推定する。また，前方部では標高 7.8 m前後

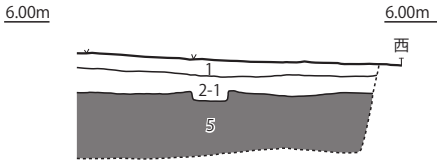

X=-67250
X=-67300
Y=62590
Y=62550
Y=62520
N
4トレンチ
3トレンチ-2
3トレンチ-1
2トレンチ
1トレンチ
地山の高さ
L-18.058
0　（1：400）　10m

第７図　トレンチ配置図

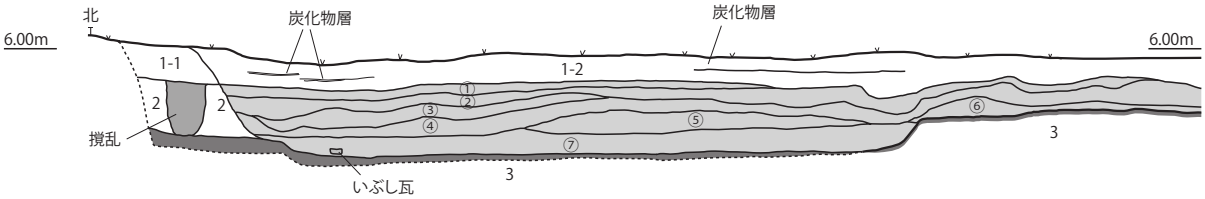
１トレンチ（南壁）

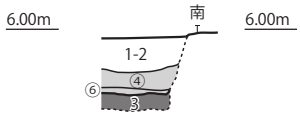


１層：表土　真砂土
２-1層：明褐色粘質土　しまり強い，粘性ややあり，灰色と瓦層状になる，現代の造成土
２-2層：明褐色粘質土
３層：橙色粘質土　しまり強い，粘性ややあり，砂粒多い
４層：明橙色粘質土　しまり非常に強い，粘性なし，点圧の土か？
５層：橙色粘質土（地山）



２トレンチ（東壁）

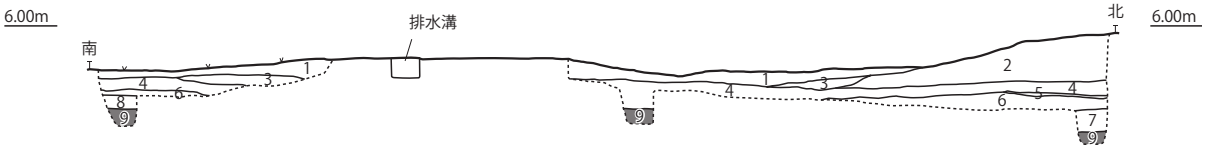




1-1層：表土，灰褐色砂質土
1-2層：表土，真砂土
２層：黄褐色粘質土，撹乱か？
３層：黄褐色粘質土（地山）

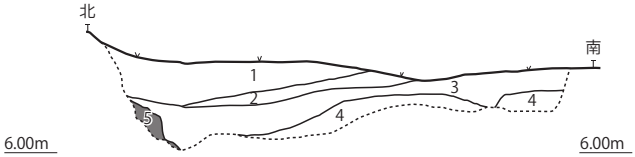
①層：灰白色粘質土　しまり強い，粘性なし，点圧か
②層：褐色粘質土　しまりややあり，粘性あり
③層：黒褐色粘質土　しまりなし，粘性あり，炭化物多量に含む
④層：暗褐色粘質土　しまりややあり，粘性あり，木片多量に含む
⑤層：黄褐色粘質土　しまりややあり，粘性あり
⑥層：灰白色粘質土　しまりあり，粘性強い
⑦層：灰褐色粘質土　しまりなし，粘性強い
池

３トレンチ（西壁）

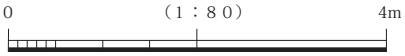


１層：真砂土
２層：灰褐色粘質土　しまりなし，粘性なし，ガラス，近現代陶磁器
３層：灰褐色砂質土　しまりなし，粘性なし
４層：にぶい橙色粘質土　しまりなし，粘性あり
５層：灰褐色砂質土　しまりなし，粘性なし
６層：にぶい黄橙色粘質土　しまりややあり，粘性あり
７層：灰褐色粘質土　しまりややあり，粘性あり
８層：青灰色粘質土（レキ，ガラス混入）
９層：青灰色粘質土・橙色粘質土（地山）
撹乱層

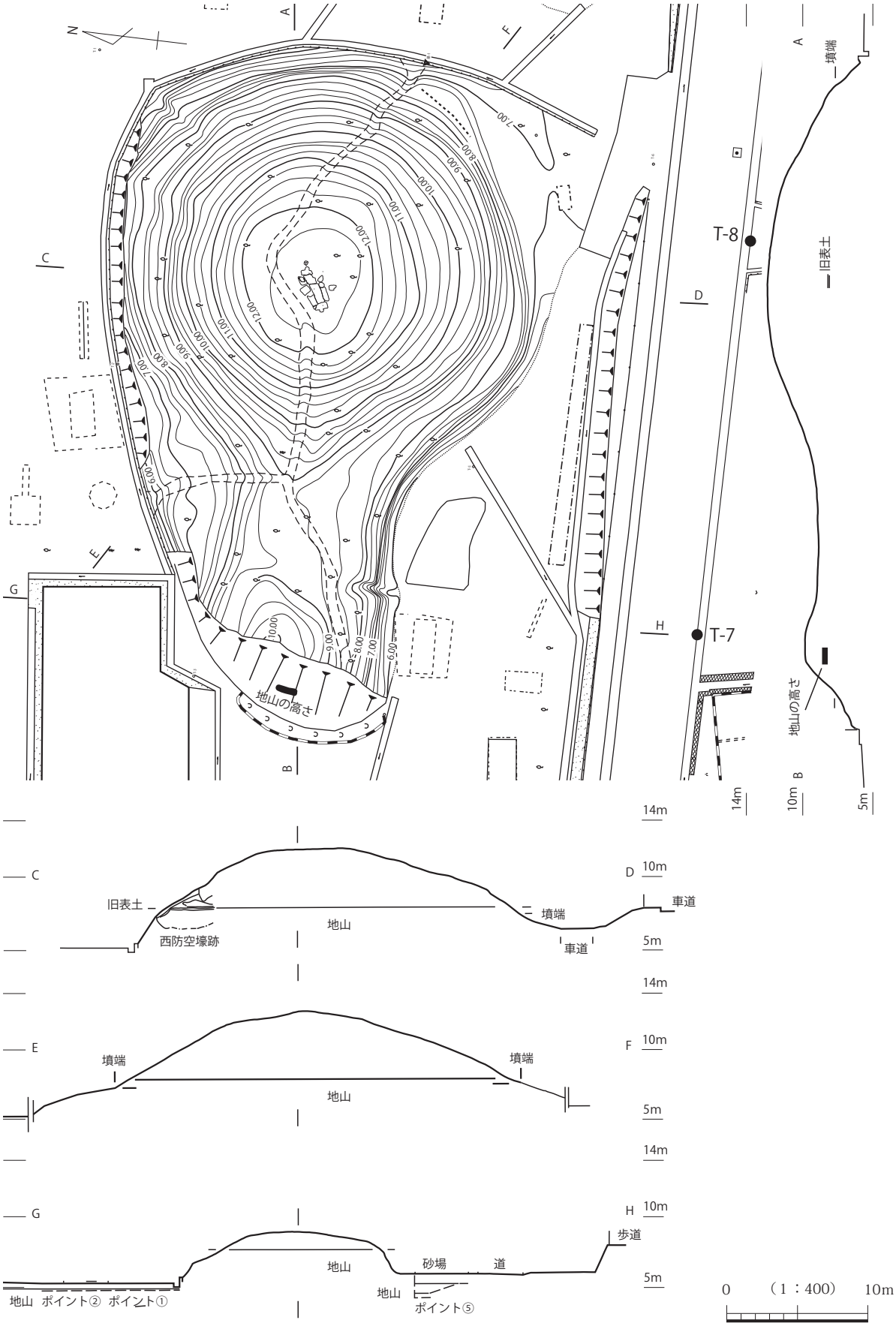
４トレンチ（東壁）



１層：表土，灰褐色粘質土　しまりなし，粘性なし
２層：灰黄褐色粘質土　しまりあり，粘性ややあり
３層：暗褐色粘質土　しまりあり，粘性ややあり
４層：褐色粘質土　しまりあり，粘性なし
５層：浅黄橙色粘質土（地山）
撹乱層



第８図　トレンチ土層図



第９図　墳丘測量図・墳丘縦横断面図

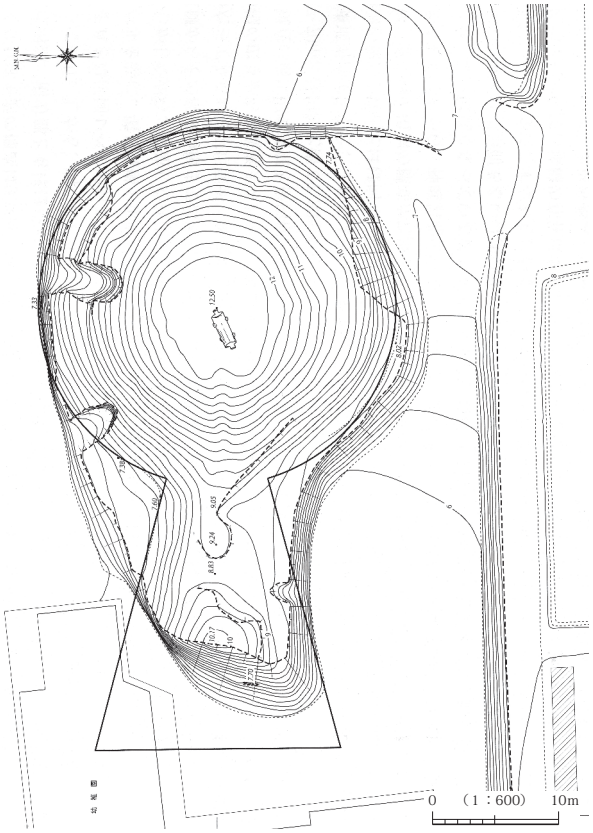
で厚さ約 10㎝の旧表土を確認している。

これらのことから，古墳の築造方法は後円部ではドーム状に地山を加工し，その上に盛土をするが，くびれ部付近から前方部にかけては，当時の地表面が平坦であったことから，特別な加工をせず，そのまま盛土を行ったと考えられる[1]。

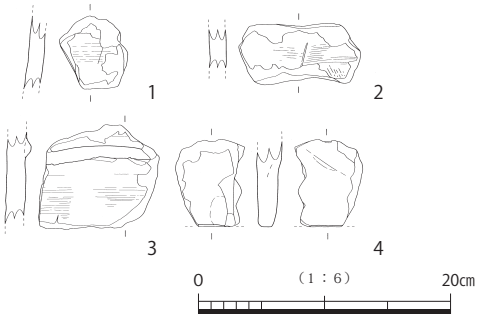
なお，墳丘と南側道路との間にあるとされる周溝であるが，後円部の地山標高 7.8 ～ 7.9 mと前方部断面の地山標高 7.8 mに対し，第９図に示した南側道路面の前方部側のポイント（Ｔ７）は標高 7.87 m（地山標高 7.07 m），後円部側のポイント（Ｔ８）は標高 7.86 m（地山標高 7.06 m）を測り，ほぼ同じ高さである[2]。

墳丘は，南から延びる低丘陵の先端を利用し，墳丘南側の丘陵部を堀状に掘削することで生じた土を盛って築いたと考えられるが，墳丘で確認できた地山から周辺の地表面の高さを比較すると，その差は 1.6 ～ 2.8 mにもなる。この数値がそのまま周溝の深さを表しているとは考えがたく，後世，当初の周溝底面の高さ以上に深く掘り下げられた可能性が大きい。そのため，周溝・基壇・段築テラス等の古墳関連施設や，その痕跡などは確認することはできなかったと推定する。

古墳の復元規模は，（内田ほか 2018）において詳細に検討され，墳長 49.2 mと復元されており，改めて検討する余地はないと考える（第 10 図）。また，埴輪については，今回も後円部墳頂部や後方部斜面から採取したが（図版 21 上の５・６），小片の上に風化が著しいことから年代を決めかねる。しかし，東西防空壕跡から出土した埴輪（第 11 図）を検討した田中は，①部位不明の破片１・２は，



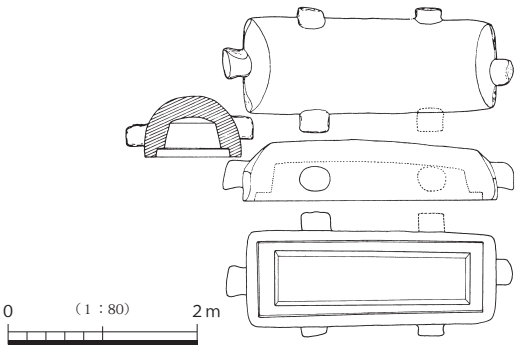
第 10 図　墳丘復元図（（内田ほか 2018）を一部改変）



１・３・４　東防空壕跡出土、２　西防空壕跡出土

第 11 図　防空壕跡出土埴輪実測図

（（田中 2016）から転載）



第 12 図　石棺実測図（（内田ほか 2018）から転載）

外面にヨコハケと斜め方向の静止痕が残り，Bb 種ヨコハケ（一瀬 1988）の可能性がある。②３は，静止痕のないヨコハケがあり，突帯断面が不定形で突出は約 0.4cm と低い。突帯下端には断続ナデ技法 A（中島 1992）の可能性が認められる。③底部片４は，外面に板状工具による左斜め上方向のオサエまたはタタキが想定され，内面にユビオサエが残る。端部は面を持つものの，カット技法のような切り取り痕跡は確認できず，底部調整技法（川西 1978･1979）とみなされるとし，以上の特徴から，古墳の年代を古墳時代中期末葉に位置付けている（田中 2016）。この評価は舟形石棺の年代観とも一致し（大谷・清野 1996），古墳の年代も５世紀末と推定することができる（第 12 図）。

今回の調査により，少なくとも古墳の西側と南側には古墳に関連する遺構が残存しないことが明らかになったと言える。

註

（１）（内田 2018）では，「台地上に全て盛り土によって築造されたものと考えられる。」としている。

（２）地山は，2021（令和３）年１～２月にかけて，南側道路の水道管老朽化改良工事の立会調査で確認した。この地山の高さも工事等で削平され，低くなっている可能性があるが，地山の最低の高さを確認できたことは意義があることと思われる。

【参考文献】

一瀬和夫 1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要Ⅴ - 応仁陵古墳外堤Ⅰ・古室遺跡Ⅲ -』大阪府教育委員会

内田律雄・曳野律夫・松本岩雄 2018「出雲市斐川町神庭岩船山古墳墳丘測量報告」『島根考古学会誌』第 35 集　島根考古学会

大谷晃二 1994・1996・1996・2012「斐川町軍原古墳について（上）（中）（下）（続）」『八雲立つ風土記の丘』№.127・№.136・№.137・№.209 島根県立八雲立つ風土記の丘

大谷晃二・清野孝之 1996「安来市毘売塚古墳の再検討」『島根考古学会誌』第 13 集　島根考古学会

加藤義成 1981『修訂　出雲国風土記参究（改訂３版）』松江今井書店

金築基・宍道年弘 1986「第６章文化財」『斐川町史　その後（二）』斐川町教育委員会

川西宏幸 1978・1979「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第２・４号　日本考古学会
（『古墳時代政治史序説』1988 塙書房　改稿再録）

島根県教育委員会 1996『出雲神庭荒神谷遺跡』

島根県古代文化センター編 2014『解説　出雲国風土記』島根県教育委員会

田中　大 2016「出雲市神庭岩船山古墳出土の円筒埴輪」『古代文化研究』第 24 号　島根県古代文化センター

中島和彦 1992「Ⅳ埴輪の生産と供給　A.「連続ナデ技法」の再評価」『奈良市埋蔵文化財センター紀要 1991』奈良市教育委員会

斐川町教育委員会 1992『島根県斐川町遺跡分布調査報告書』（斐川町文化財調査報告 10）

山本清 1951「出雲国における方形墳と前方後方墳について」『島根大学論集（人文科学）』第１号
（『山陰古墳文化の研究』1971 山本清先生退官記念論集刊行会　再録）

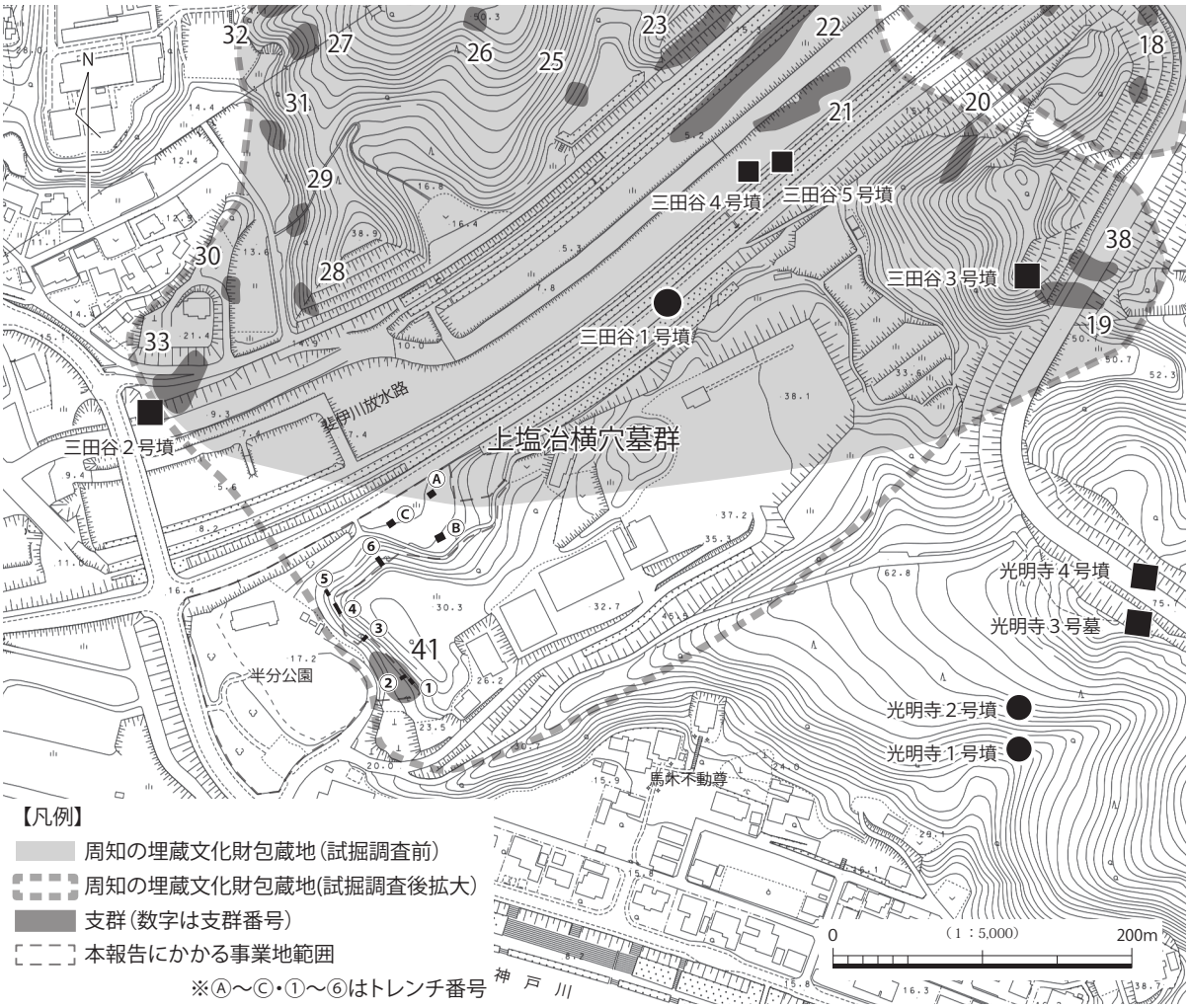
第２章　上塩冶横穴墓群第 41 支群の調査

第１節　調査に至る経緯と経過

出雲市都市建設部建設企画課が実施する半分公園整備事業の予定地の一部が，周知の埋蔵文化財包蔵地「上塩冶横穴墓群」に含まれることから，2015（平成 27）年２月 17 日～３月 16 日のうち３日間で範囲確認調査を実施した。多目的広場の造成予定地である丘陵裾部（東広場）では，トレンチ３箇所（A ～ C）を設定し，重機掘削により調査を行った。また，遊歩道の設置が計画された丘陵部は，周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったが，６箇所のトレンチ（１～６）を設けて人力掘削により遺構・遺物の有無を確認した。

その結果，東広場のトレンチでは遺構・遺物は全く確認できなかったが，丘陵部のトレンチ２箇所で横穴墓の前庭部または墓道と考えられる遺構を確認し，須恵器等の遺物も出土した。

この調査成果から，丘陵部まで包蔵地範囲を拡大し，新たに「上塩冶横穴墓群第 41 支群」とした。

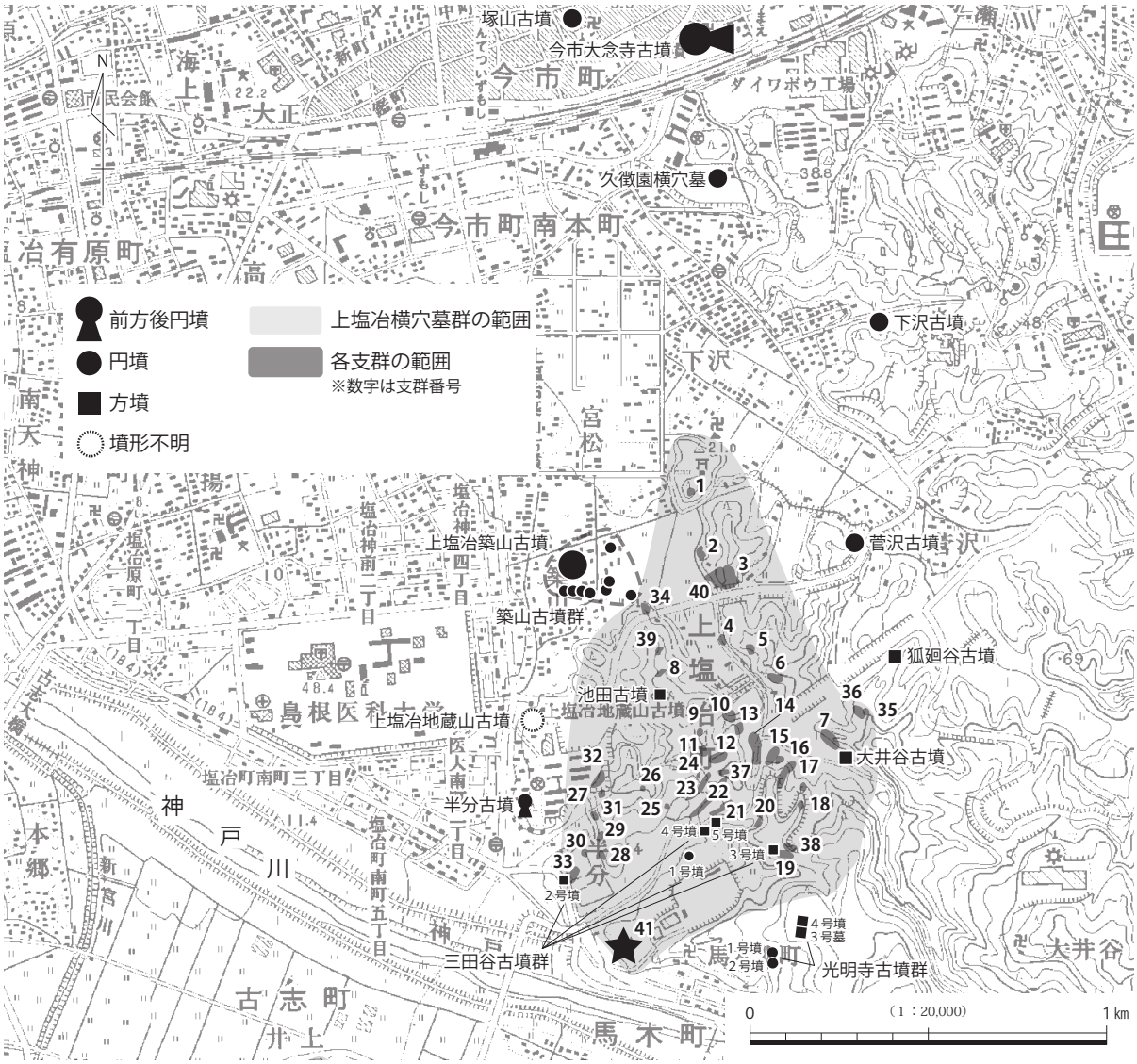


第 13 図　上塩冶横穴墓群（第 41 支群）調査地位置図

第２節　遺跡の位置と環境

上塩冶横穴墓群が位置する出雲市上塩冶町周辺は，斐伊川と神戸川に挟まれた標高 10 m前後の微高地で，南には中国山地から派生した複数の低丘陵が伸びる。上塩冶横穴墓群はその低丘陵に築かれ，これまでに東西約 1 ㎞，南北約 1.5㎞に及ぶ範囲で 41 支群 236 穴もの横穴墓が確認されている。周辺は，古墳時代後期後半以降，出雲西部の首長墳である上塩冶築山古墳や上塩冶地蔵山古墳をはじめ，多くの古墳や横穴墓の密集地として知られる。特に上塩冶築山古墳周辺では，首長墳を取り巻くように築造された築山古墳群が発見され，さらにその背後の丘陵には上塩冶横穴墓群が位置するという構造が明らかになった。上塩冶横穴墓群には築山古墳群の被葬者に次ぐ地位の人々が葬られたと推測され，首長墳を頂点とした社会構造が古墳や横穴墓の築造状況に反映されているといえよう。

今回調査を行った第 41 支群は，上塩冶横穴墓群の南端にあたり，神戸川を眼前に臨む立地である。周辺には半分古墳，三田谷古墳群，光明寺古墳群等の中・小規模の古墳も築かれている。



第 14 図　上塩冶横穴墓群と周辺の後期古墳

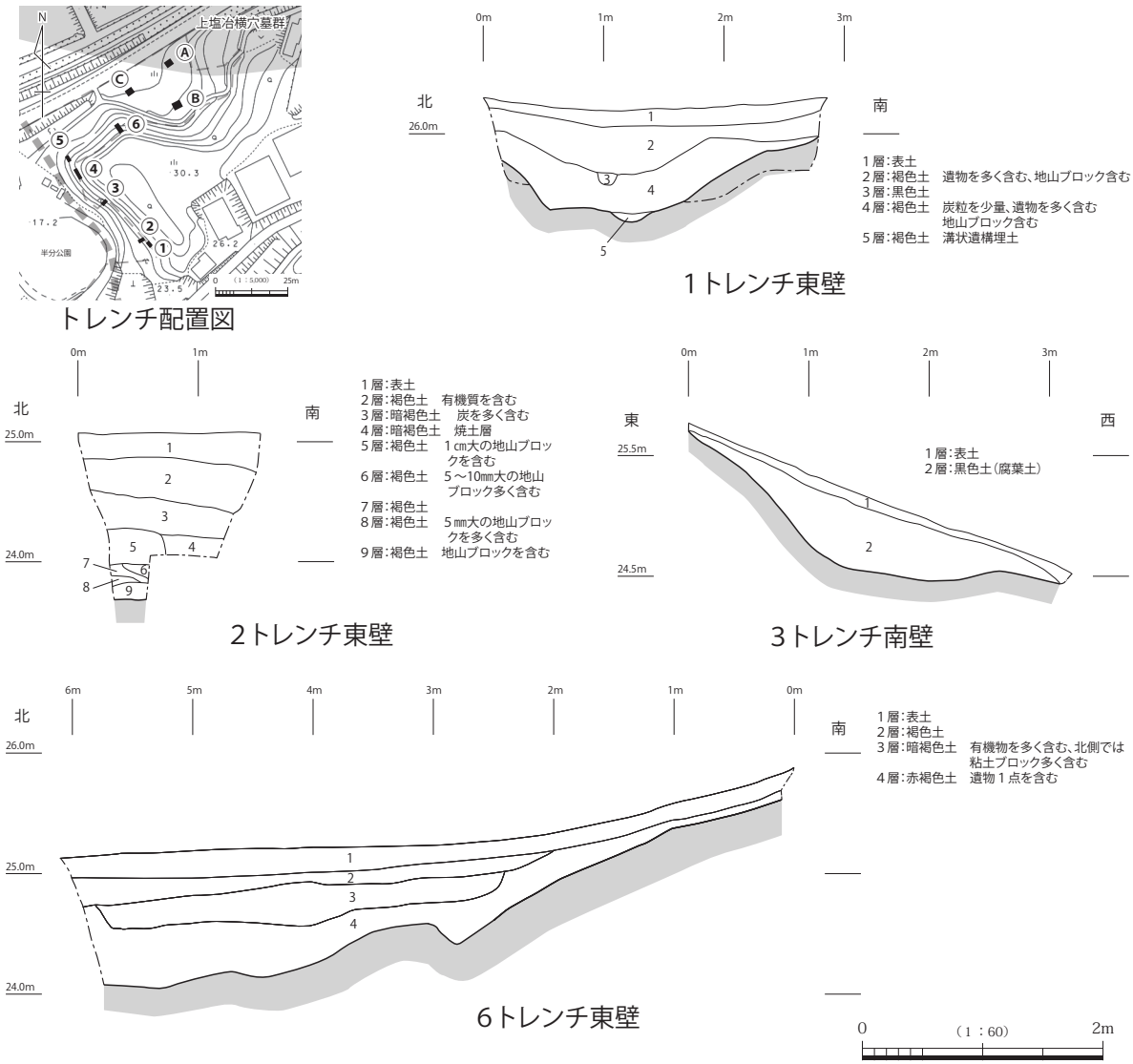
第３節　調査の成果

１　トレンチ調査の成果（第 15 図）

東広場に設けたＡ～Ｃトレンチでは，遺構・遺物は全く確認できなかった。一方，丘陵部では，６箇所のトレンチのうち，丘陵西側斜面に設けた１～４トレンチで遺構･遺物を確認した。本節では，遺構・遺物を確認したトレンチに対象を絞って，その状況について記載する。なお，丘陵北側に設けた５トレンチでは遺構・遺物が見られなかったが，周辺で須恵器甕片を多く採集した。いずれも小片で全形の復元・図化に至らなかったものの，横穴墓の存在をうかがわせる資料である。

（１）１トレンチ

最も南に位置するトレンチで，南西向きの斜面がやや窪んだ位置に 2.7 × 1.2 mの規模で設定した。地表面の標高は約 24 mである。トレンチ中央部で地山が逆台形に削り出されており，床面の平坦面



第 15 図　１～４トレンチ土層断面図

幅は約１ｍを測る。また平坦面の中央では，トレンチ東壁から約 15㎝の長さで幅約 30㎝の溝状遺構を確認した。遺物は，２・３層から須恵器片が多量に出土している。この状況から，横穴墓の前庭部の一部と考えられ，中央の溝状遺構は排水溝の可能性がある。横穴墓本体はさらに東側に存在するとみられる。

（２）２トレンチ

１トレンチの北３ｍ地点に位置し，規模は 2.1 × 1.4 ｍ，地表面の標高は約 24 ｍである。４層は焼土と炭片を含み，５層を切り込むように堆積する。層中から須恵器片が数点出土しているが，いずれも小片であり，後世の野焼き等に伴う落ち込みに混入したものと考えられる。５～９層は地山ブロックを多く含み，遺物はない。地山は９層直下で検出しており，その検出面は平坦であった。１トレンチでも地山が平坦に加工されていたことから，２トレンチでも横穴墓の前庭部または墓道を検出した可能性がある。

（３）３トレンチ

２トレンチから北へ約 25 ｍ，標高約 25 ｍの地点に設けた 3.1 × 1.8 ｍのトレンチである。表土下は樹根を多く含む腐葉土が厚く堆積し，遺物は表土中から出土した土師器片１点のみである。地山はトレンチ東肩から緩やかに下降し，1.5 ｍ地点から 3.0 ｍ地点にかけて幅 1.5 ｍの平坦面が削り出される。土層の状況から，比較的最近まで使用されていた山道の痕跡であると判断した。

（４）４トレンチ

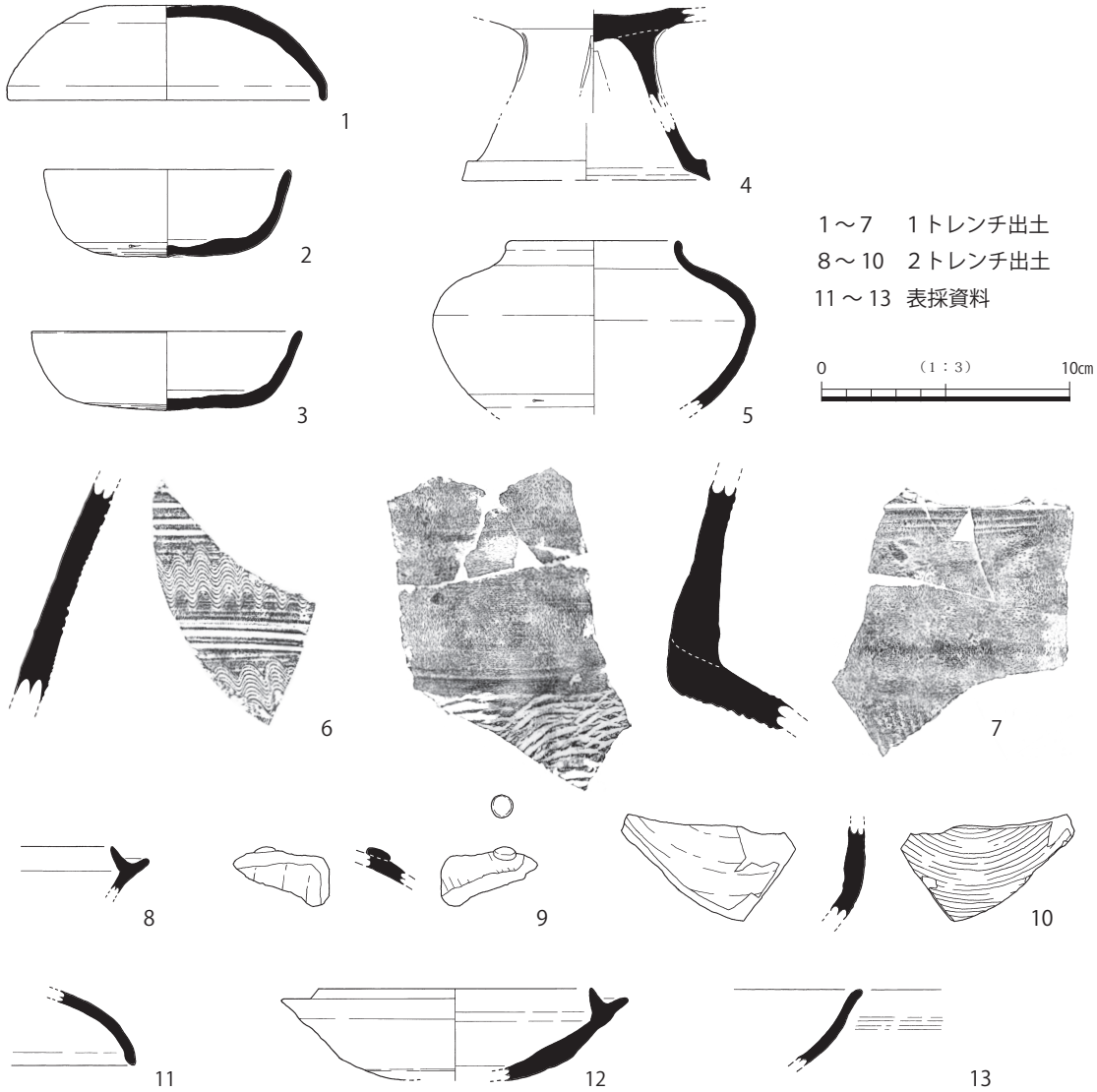
３トレンチ付近から北西方向に延びる尾根先端部の地表面に段差が見られたことから，段差に直交するよう 5.8 × 1.0 ｍのトレンチを設定した。地表面の標高は約 24 ｍである。トレンチ南肩から約 2.7 ｍ地点を起点とし，尾根先端に向けて平坦面を造り出したと考えられるが，１・２トレンチの横穴墓前庭部や，３トレンチの山道とみられる平坦面と比較して面が整っていないことから，何らかの加工痕跡はあるものの，横穴墓等に伴う遺構とは考えがたい。なお，４層から須恵器片が１点出土した。

２　出土遺物（第 16 図）

出土遺物の大部分を須恵器が占めており，今回は甕胴部片等を除く図化可能な資料を掲載した。掲載資料は全て須恵器である。１～７は１トレンチ出土，８～ 10 は２トレンチ出土，11 ～ 13 は表採資料である。器面調整については，ロクロ回転を利用したナデを「回転ナデ」，そうではないものを単に「ナデ」と呼称する。編年観については，大谷晃二氏の研究（大谷 1994・2001）に準拠した。

１は杯蓋である。口径 12.6㎝，器高 3.8㎝を測る。体部内外面は回転ナデ，天井部内面はナデ，同外面はヘラ削りを省略し，ナデで仕上げる。この調整手法が主体をなすのは，出雲５期（飛鳥Ⅰ併行）とされる。また，成形に伴う砂粒の動きから復元できるロクロ回転は時計回りである。

２・３は杯である。２は口径 9.8㎝，底部径 5.4㎝，器高 3.5㎝を測る。底部外面は回転ヘラ削り，同内面はナデ，それ以外は回転ナデで仕上げられる。回転ヘラ削りの幅は 0.5 ～ 0.6㎝で，つくりが丁寧な印象を受ける。また，成形・調整に伴う砂粒の動きから復元できるロクロ回転は時計回りである。３は口径 10.8㎝，底部径 6.0㎝，器高 3.2㎝を測る。２と比べて若干口径が大きいものの，調整



第 16 図　出土遺物実測図

や胎土，焼成具合が酷似しているため，この２点の供給元は同じである可能性が高い。いずれも出雲 6b ～ 6d 期（飛鳥Ⅱ～Ⅲ併行）に位置づけられる。

４は低脚無蓋高杯である。杯底部から脚上部と脚端部に分かれ，接点はないが胎土と焼成具合が酷似するため，同一個体と推測する。脚部復元高 6.2㎝，同端部径 10.0㎝を測る。なお，脚端部は小片のため，径の復元には若干の不安がある。内外面とも回転ナデで仕上げ，脚端部外面には面をもち，端部は下方に若干拡張する。４方透かしを志向しているが，２方は台形，残り２方は浅い切れ目という変則的な組み合わせである。透かしの特徴は大谷分類のＡ５類とＡ６類の中間的な様相を示すとみられ，年代は出雲５～６期に位置づけておきたい。

５は短頸壺である。口径 6.8㎝，口縁部高 1.0㎝，残存高 6.8㎝，体部最大径 13.0㎝を測る。口縁端部はわずかに肥厚し，丸く収める。体部下半は回転ヘラ削り，それ以外は回転ナデで仕上げる。また，成形・調整に伴う砂粒の動きから復元できるロクロ回転は時計回りである。型式変化に基づく年代の絞り込みは困難だが，他の１トレンチ出土遺物の年代と大きく相違するものではないだろう。

６・７は甕である。６は頸部で内外面回転ナデ仕上げ，外面の施文は沈線３条と波状文の組み合わ

せが２段確認できる。７は頸部から体部の破片で，頸部内外面は回転ナデ，体部外面は平行叩き目，同内面は同心円叩き目がみられる。外面の施文としてヘラ描きによるＵ字状の文様と沈線１条がある。

８は杯身である。たちあがり高は 0.6㎝，薄く仕上げられ，端部は尖り気味である。出雲５期に位置づけられる。

９・10 は提瓶で，いずれも体部の破片である。接点はないが胎土と焼成具合が酷似するため，同一個体と推測する。９の外面にはボタン状の把手が付き，外面はカキ目とそれを切る横方向のナデ，内面は縦方向の回転ナデで仕上げる。外面のナデは頸部接合とそれに伴う器表の平滑化を目的としたものとみられる。10 の外面はカキ目，内面は回転ナデで仕上げる。また，砂粒の動きから復元できるカキ目工具の移動方向は反時計回りである。ボタン状の把手は出雲４期(TK209 型式併行)に出現し，出雲５期には主流となるとされており，８の年代とも整合する。

11 は杯蓋である。特徴は１と共通している。

12 は杯身である。口径 11.0m，残存高 3.7㎝を測る。たちあがり高は 0.6㎝で，尖り気味である。体部内外面は回転ナデ，底部内面はナデ，同外面はヘラ削りを省略してナデで仕上げる。また，調整に伴う砂粒の動きから復元されるロクロ回転は時計回りである。口径や調整手法の特徴から，出雲５期に位置づけられる。

13 は無蓋高杯である。口縁は緩やかに外反し，端部は丸く収める。内外面とも回転ナデで仕上げ，外面には浅い凹線が２条めぐる。概ね出雲４～５期に位置づけられる。

第４節　結語

今回の試掘調査では，丘陵部のトレンチで２基の横穴墓の前庭部または墓道と推測される地山の加工痕跡を確認した。また出土遺物の特徴から，少なくとも出雲５期以降の造墓と推定できる。限られた調査成果ではあるものの，この発見により，現状で上塩冶横穴墓群の南端となる支群を把握できたことは大きい。墓室部分の調査には至らなかったため，第 41 支群の実態把握は今後の課題として残しておきたい。

参考文献

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集 島根考古学会

大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』 平田市埋蔵文化財調査報告第８集 島根県出雲土木建築事務所・平田市教育委員会

出雲市教育委員会 2016『上塩冶横穴墓群第 40 支群』県道出雲三刀屋線上塩冶工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１　出雲市の文化財報告 32

出雲市教育委員会 2020『令和元年度出雲市文化財調査報告書』出雲市の文化財報告 44

出雲弥生の森博物館 2018『上塩冶築山古墳の再検討』出雲弥生の森博物館研究紀要第６集

門脇俊彦 1980「上塩冶横穴墓群」『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会ほか

写真図版

神庭岩船山古墳　遠景　（北西から）

神庭岩船山古墳　全景（北西から）

図版 2　神庭岩船山古墳

神庭岩船山古墳　全景　（西から）

南側墳丘側面（東から）

墳丘西側の現状（南東から）

後円部上の舟形石棺（北東から）

図版 4　神庭岩船山古墳

旧荘原幼稚園舎　解体前の状況（南から，右側が古墳）

旧荘原幼稚園舎　解体作業中の状況（西から）

立会調査（ポイント１）土層堆積状況

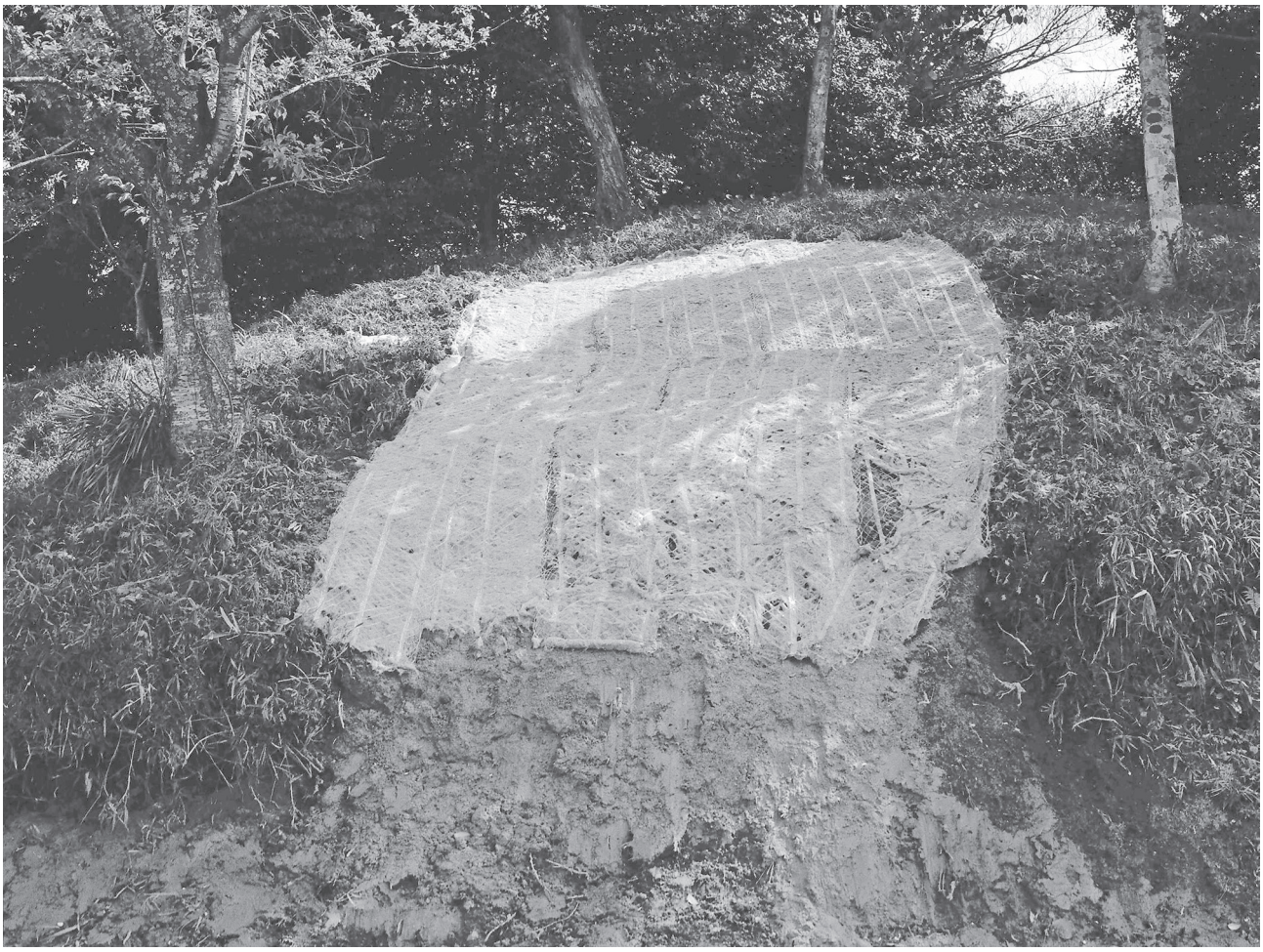
立会調査（ポイント３）土層堆積状況

図版 6　神庭岩船山古墳

立会調査（ポイント 4）土層堆積状況

立会調査（ポイント 5）土層堆積状況

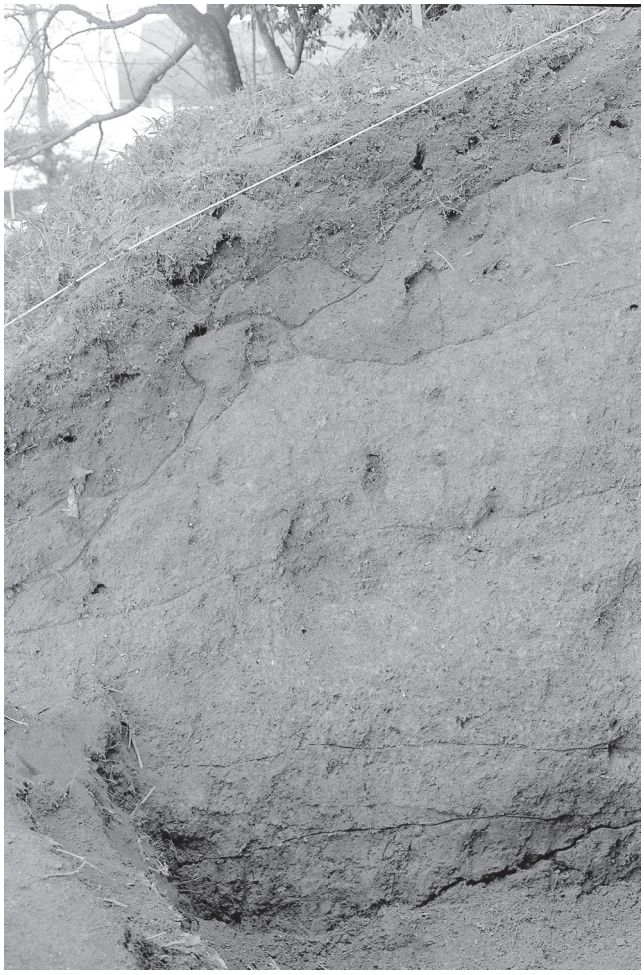
東防空壕跡　調査前　（北東から）



東防空壕跡　埋め戻し後の状況（北から）

図版８　神庭岩船山古墳

東防空壕跡　東壁　（西から）



東防空壕跡　東壁２　（西から）

東防空壕跡　東壁～奥壁（北西から）

東防空壕跡　奥壁～西壁（北東から）

東防空壕跡　西壁（東から）

東防空壕跡　西壁２　（東から）

西防空壕跡　調査前　（北から）

図版 10　神庭岩船山古墳

西防空壕跡　完掘状況　（北から）

西防空壕跡　東壁　（西から）

西防空壕跡　調査中の様子

西防空壕跡　西壁（東から）

図版 12　神庭岩船山古墳

神庭岩船山古墳周辺米軍撮影写真（1947（昭和 22）年撮影）

神庭岩船山古墳周辺航空写真（2018（平成 30）年撮影）

範囲確認調査箇所　全景（南西から）

1トレンチ　完掘状況（西から）

図版 14　神庭岩船山古墳

１トレンチ　南壁土層（北東から）

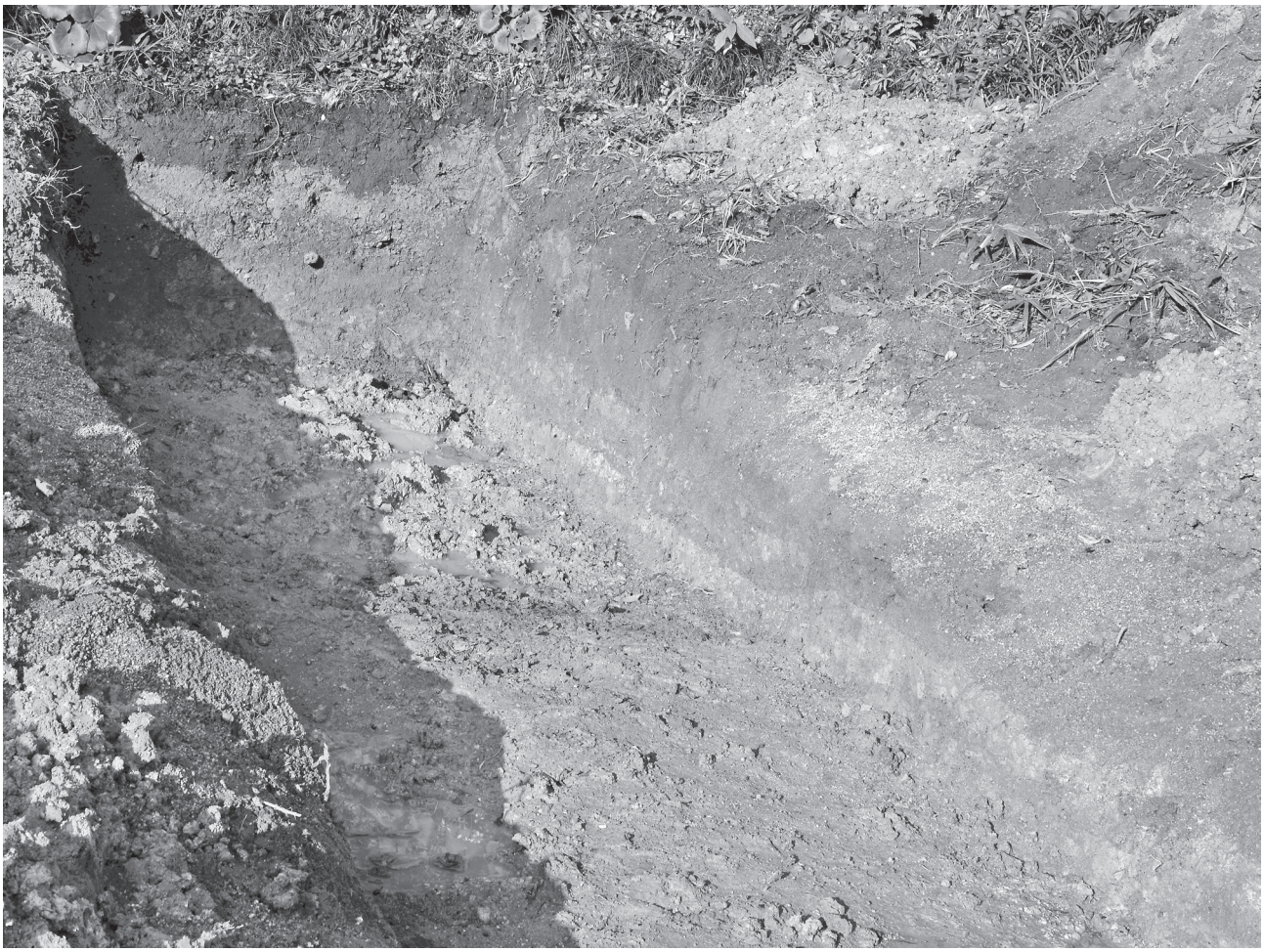
１トレンチ　東～南壁土層（北西から）

2 トレンチ　完掘状況（南から）

2 トレンチ　東壁土層（南西から）

図版 16　神庭岩船山古墳

3 トレンチ　完掘状況（南から）



3 トレンチ　東壁土層（南西から）

４トレンチ　完掘状況（南から）

４トレンチと墳丘（後円部）の位置関係

図版 18　神庭岩船山古墳

４トレンチ　東壁土層（南西から）

４トレンチ　北壁土層（南から）

前方部トレンチ（西から，手前は 1 トレンチ）

図版 20　神庭岩船山古墳

フェンス工事（北から）

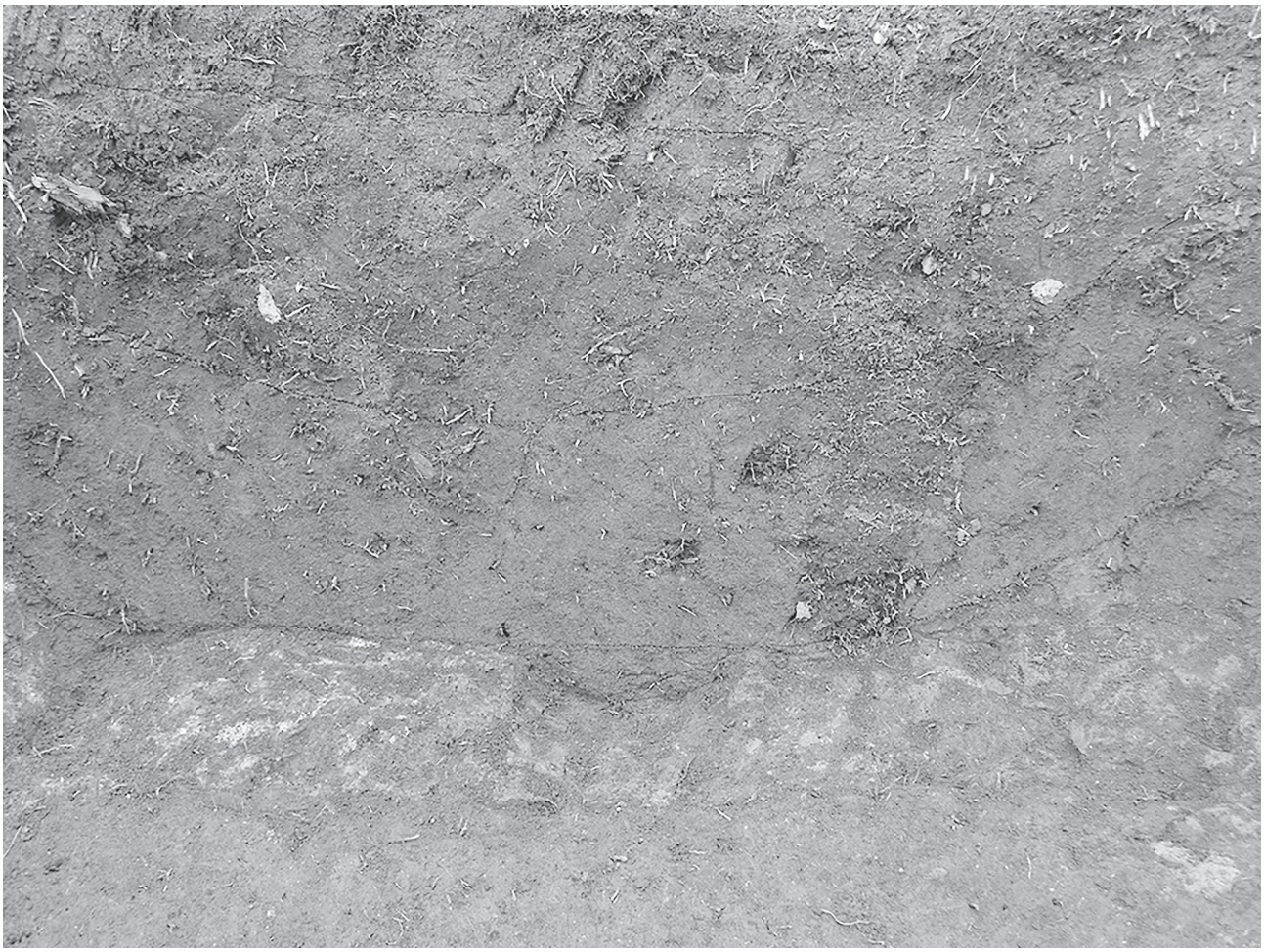
フェンス工事（南から）

神庭岩船山古墳　出土遺物（1～4は第 11 図対応，5 [後円部]・6 [前方部］は墳丘表採遺物）

神庭岩船山古墳　出土遺物

図版 22　上塩冶横穴墓群（第 41 支群）

上塩冶横穴墓群（第 41 支群）　調査前（南西から）



1 トレンチ完掘状況（南西から）

2 トレンチ完掘状況（南西から）

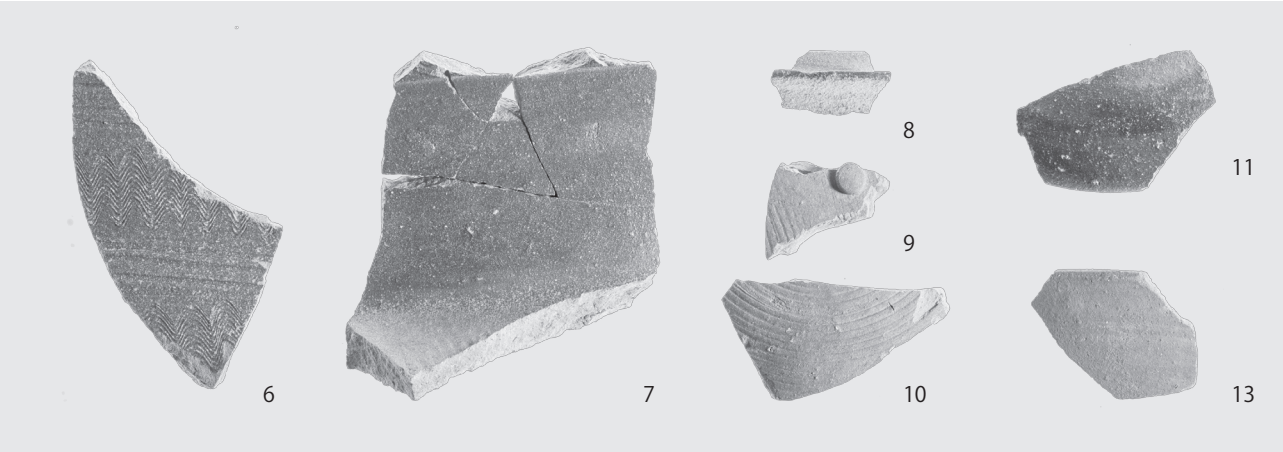
2 トレンチ北壁土層（南東から）

3 トレンチ完掘状況（南から）

4 トレンチ完掘状況（北から）

5 トレンチ完掘状況（北から）

6 トレンチ完掘状況（北から）



上塩冶横穴墓群（第 41 支群）　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	れいわにねんどいずもしぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　名	令和２年度出雲市文化財調査報告書
副書名	神庭岩船山古墳　上塩冶横穴墓群（第 41 支群）
シリーズ名	出雲市の文化財報告
シリーズ番号	47
編著者名	景山このみ（編），原　俊二，石原　聡，黒田祐介
編集機関	出雲市　市民文化部　文化財課
所在地	〒 693-0011　島根県出雲市大津町 2760　TEL（0853）21-6618
発行年月日	令和３年（2021）３月

ふりがな		コード		北　緯	東　径	発掘期間	発掘面積
所収遺跡遺名	所在地	市町村	遺跡番号				発掘要因
神庭岩船山古墳（かんばいわふねやまこふん）	島根県出雲市（しまねけんいずもし） 斐川町荘原（ひかわちょうしょうばら）273 番外	32203	Ｙ８ （島根県遺跡番号）	35° 23′ 30″	132° 51′ 20″	20160801 ～ 20170110 20170310 ～ 20170311	約 61㎡ 建物解体等
上塩冶横穴墓群（かみえんやよこあなぼぐん） 第（だい）41 支群（しぐん）	島根県出雲市（しまねけんいずもし） 上塩冶町（かみえんやちょう）906 番１外	32203	W 138-41 （島根県遺跡番号）	35° 20′ 26″	132° 45′ 43″	20150217 ～ 20150316	約 44㎡ 公園整備

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神庭岩船山古墳	古墳	古墳時代			古墳時代中期の前方後円墳
上塩冶横穴墓群 第 41 支群	横穴墓	古墳時代	横穴墓２基 （前庭部または墓道）	須恵器 土師器	古墳時代後期の横穴墓群 （新発見の支群）

要約

神庭岩船山古墳は，荘原小学校の敷地内にある古墳時代中期中葉の前方後円墳である。全長 49.2 mと推定復元されている。

今回の調査では，古墳に隣接する旧荘原幼稚園解体工事に併せ，工事立会・範囲確認調査を実施したが，古墳に関連する遺構や遺物は確認できなかった。この度の調査成果に過去の調査記録も併せて検討することで，古墳の築造方法を推定することができた。

上塩冶横穴墓群は，236 基以上の横穴墓からなる県内最大の横穴墓群である。今回の試掘確認調査では，神戸川に面する丘陵斜面において，横穴墓の前庭部あるいは墓道と考えられる遺構を２箇所確認した。これまで遺跡の範囲外であった場所での新発見であり，上塩冶横穴墓群の南端を把握できたことになる。横穴墓本体の調査は実施できなかったが，出土遺物から大谷編年出雲５期（飛鳥Ⅰ併行）以降に造墓された可能性があることが分かった。

出雲市の文化財報告　47

令和２年度出雲市文化財調査報告書

神庭岩船山古墳
上塩冶横穴墓群
（第 41 支群）

令和３年（2021）３月

編　　集　　出雲市 市民文化部 文化財課
〒 693-0011 島根県出雲市大津町 2760 番地
ＴＥＬ（0853）21 - 6618

発　　行　　出雲市教育委員会
〒 693-8530 島根県出雲市今市町 70 番地
ＴＥＬ（0853）21 - 6874

印刷・製本　　有限会社　福間秀文堂